
明智家 天下統一への道

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明智家 天下統一への道

【Nコード】

N8523M

【作者名】

刹那

【あらすじ】

信長を討つた光秀を討つべく秀吉は山崎の地へと入った。

其処に待ち受けるは明智勢一万。

圧倒的優位に立つ秀吉はその戦で思わぬ被害を負うこととなる。

それを負わせた策略とは（秀吉が主人公ではありません）。

明智家が嫌いな方はお退き返し下さい。

序章（前書き）

処女作ですので宜しくお願いします。

序章

天正十年。

東西に勢力を広げ、その名を戦国の世に轟かせた戦国一の大名、織田信長。

しかし天下取りを目前に控え、毛利攻めのため本能寺に宿泊しているところを自らの家臣、明智光秀率いる軍勢に襲撃される。

本能寺の守備兵は少なく千にも満たない小勢、それを攻める明智軍の総勢は一万三千。

いかに信長が優れた人物といえども、多勢に無勢では勝ち目はなく。その時、本能寺襲撃の報告を聞いた信長の息子である織田信忠は京の行政担当者である村井貞勝と共に二条城より父信長救援のため、出撃するも所詮は多勢に無勢、結局は二条城に撤退後三度に渡り明智軍を撃退するも隣の屋敷からの襲撃に防衛線を支えきれず二条城は陥落。

信忠は自刃、その他の諸将も包囲前に逃げた者以外は皆討ち死にしたという。

更に本能寺も信長の命で森蘭丸が火を放ち、信長はその中で自刃したという。

後のこの事件は「本能寺の変」と呼ばれることになる。

安土城も明智秀満の手に落ち、京周辺は明智軍の手に落ちた。

序章（後書き）

初めての作品は緊張です。

第一話 山崎決戦（前編）（前書き）

第二回目

第一話 山崎決戦（前編）

第一話 山崎決戦 前編

本能寺にて信長を討ち取った明智軍は坂本城に集まっていた。現在明智家が支配している地域はこの坂本城がある近江を始め、京、丹波などの四つである。

幾ら信長を討ち、京を奪い取ったといえども周りを旧織田家の家臣団に囲まれてしまっているため油断は出来なかった。

さらに、信長討ち死にの報を受け、旧家臣団がこの坂本を目指してくることも予想できていた。

その為、現在明智家の重要人物は坂本城天守で会議をしていた。

その会議に出席したのはまず明智家当主である明智光秀を始め、その従兄弟であり明智家筆頭家老の明智秀満。さらに本能寺襲撃の立役者であり、秀満と同じく明智家筆頭家老の斎藤利三、明智家切手の重臣妻木広忠である。この三人を明智家臣団の中でも美濃衆と呼んでいた。

そして、近畿衆である山崎長徳、阿閉貞征の二人も来ていた。

そして最後にやってきたのが、

『遅れてしまい申し訳ございません。明智光慶、参上いたしました。』

そう言うて入ってきたのは光秀の息子である光慶だ。

光慶は十四歳ながらその際は明智家の中でも知られており、下の者にも区別無く接することから民からも慕われている。

更に、明智家の重臣である細川藤孝に勉学を習っていたため、将としての才能を開花させていた。

史実では藤孝はこの山崎の合戦には関わらなかったが光慶を大事に思っているため今回は参加した。

しかし藤孝は、明智家に協力しなかつた筒井家の押さえとして現在は大和の郡山城で待機している。

「よく来たな光慶。たくましく育って父は嬉しく思うぞ。」

光秀は光慶にそう言った。

その言葉はこの場にいる者を代表していった言葉であつた。

『ありがとうございます。それで父上、これからどう動く気でございますか。』

光慶はいきなり本題に切り込んだ。

光慶からすれば、早めにこの先の方針を決めておかねば功に走つた家臣団の所為で明智家が分裂する可能性を考えていたからだ。

そしてまず直面している危機を乗り越えなければこの先の事すら見えない。

「若の言つとおりでございます。」

そう言つたのは利三であつた。

彼も光慶と同じ事を考えていたからだ。

「我が明智家は、この坂本城のある近江の国を中心に、京、大和、丹波の四つでございますが、この四つは地理的に天下を狙うのは十分でございますが。問題が幾つかございます。」

「問題とは何でございますか。」

そう言つて利三に聞いたのは長徳であつた。

長徳からすれば、現在は此方の予想通りに事が運んでいると思つていたからだ。

「では説明いたしましょう。まず一つは現在の当家と周りを囲んでいる諸家との関係でございます。」

現在明智家を囲んでいるのは、越前を中心に支配している柴田勝家率いる柴田家、尾張を中心に支配している織田信孝率いる新織田家、但馬たじまを中心に支配している羽柴秀吉率いる羽柴家、そして紀伊の国には長年織田家からの攻勢に耐えてきた鈴木家が存在している。明智家は主君である信長を討つたこともあり、鈴木家を抜かして旧織田家家臣団との関係は最悪の物であつた。

「つまりこのままでは何時攻撃されても可笑しくないと言うことです。そして二つ目が家臣の数です。」

旧織田家はさすがに信長の跡を継いだこともあって、豊富な人材と徳川家との同盟関係も存在している。

そして羽柴家は蜂須賀正勝や黒田官兵衛、池田恒興を始めとした名だたる家臣団が存在している。

そして柴田家は現在上杉家と交戦中とは言え、前田利家、丹羽長秀等の武闘派集団を家臣に加えている。

しかし明智家は主君信長を討ったこともあり、質は高いが数では完全に此方が負けていた。

「これだけを見れば、我が方に勝ち目がないように見えるのだが。」
秀満がそう言った。

それに答えたのは利三ではなく、光慶であった。

『現在は耐え続けるしかないでしょう。ですが、攻めてくる軍勢を耐え凌げば逆転の目は必ず見えてくるでしょう。』

「若の言うとおりです。現状はかなり苦しいですが敵の攻勢を堪え忍んでいけば、我らにも必ず希望はございます。」

利三はそう言いはなった。

諸將も此処まで来れば、地獄まで付いていくという風な考えなので、その考えは賛成的だった。

『そこでまず我々は、秀吉に備えなければならぬと考えます。』
光慶がそう言ったとき、光秀と利三以外の将達は首を傾げた。

「若、現在秀吉は備前の毛利家と交戦中でございます。此方に来るのはしばらく時間が掛かると。」

広忠がそう言った。

その考えは通常なら正しかっただろう、他家との交戦中にそのようなことが起きればまずは自分の安全を確保してから討ちに来るだろう。

事実勝家や信孝も他家との交戦中であつたため、本能寺後の対応に遅れてしまったのだ。

『秀吉を嘗めてはいけません、秀吉の才は他者より抜きん出ています。あの者ならば、恐らく遅くとも一ヶ月、早くても十日以内に我が家に攻め込んでくるでしょう。』

光慶の何処か自信に満ちたその言葉に諸将は言い返せなかった。

「私も若の考えに賛成でございます。」

「儂もだな。」

そう言つて光慶に賛成したのは、利三と光秀であった。

二人は秀吉の恐ろしさを常に感じていたため光慶に賛成した。

光秀が賛成したと言うことは明智家の決定ということになる。

「それで光慶は何か策はあるか。」

光秀はまず最初に光慶に策を尋ねた。

何故他の者を差し置いて光慶に尋ねたのか他の者には簡単に分かった。

光秀は光慶が何処まで育つたか確かめようとしているのだ。

これで確かな策を答えることが出来れば、今後の明智家を担っていけると考えたのだ。

『私の考えは、こうであります。まず秀吉対策のために軍を配置しておくことです。』

「なるほど、しかし何処に軍を配置するつもりだ。」

『秀吉軍は恐らく長秀殿と合流するために摂津（現在の大阪）を指すでしょう。そうなると恐らく秀吉は摂津と山城の国境にある、山崎の地に布陣する可能性が高いでしょう。我らはその前に山崎に布陣して、敵に備えなければなりません。』

その策に利三は一安心した。

光慶の考えた策は十分合格点に届いていたからだ。

そして周りの諸将も、光慶の策に賛同した。

それを確認した光秀が告げた。

「これより我らは秀吉に備え、出陣する。目指すは山崎じゃ。」

「おーーーーー!!!」「」「」

そして、明智軍は天正十年（1582年）六月十日に山崎に到着し

ていた。

一方、光慶が襲来を予想していた秀吉軍だったが、既に畿内に入っていた。

途中で合流した丹羽長秀、神戸信孝を交え、光慶が予想していたとおり一路山崎を目指していた。

「此度のこと、誠に残念でござった。」

秀吉はいかにも悲しそうに言った。

恐らく心からの言葉であったのだろう、目には涙が溢れていた。

「秀吉殿の言うとおりじゃ。今回の謀反誰が予想できたか。」

「その通りじゃ、だから儂等が信長様の敵討ちを行わなければならぬのじゃ。」

「うむ、その通りだ。」

そのような会話をしながら、羽柴軍は着実に山崎に近づいていた。

そして、十二日に羽柴軍は山崎に到着した。

秀吉に報告が来てから、十日目のことであった。

まさに光慶が予想したとおりの速さであった。

「やはり敵はまだ、此方に布陣していないようすな。」

長秀は山崎の地を眺めながらそう言った。

「誠ですな。恐らく敵は此方の速さに驚いていることでしょうな。」

二人の言うとおり、宝積寺を背に本陣を配置した秀吉本隊からは明智軍の姿は確認できなかった。

「儂の予想では明日に布陣するでしょう、そこを狙います。」

秀吉は軍議で決まったことを言った。

その軍議で秀吉がこの戦の総大将に任命されたのだ。

この戦に勝利すれば、織田家の中で秀吉の地位はかなり高くなるだろう。

その為この戦は負けるわけにはいかなかったのだ。

そして明日十三日。

明智軍が勝竜寺を背に本陣を置いた。

そして両軍は円明寺川を挟んで対峙した。

明智勢は光慶が合流したため一万九千、対する羽柴勢は二万九千、約一万の差であった。

しかし明智勢はまだ本隊しか到着していないため、一万しか居なかった。

それだけでは完全に劣勢である、それを秀吉が見逃すはずがなかった。

「予想通り敵は完全に揃って居らぬ。ならば今が攻め時じゃ。かれ。」

秀吉は全軍に号令した。

羽柴勢一万五千が明智勢一万二襲いかかった。

明智勢を率いるのは総大将光秀、そして筆頭家老の利三に美濃衆の貞征と茂朝であった。

もちろんこの四名は戦上手であったため、自軍より多い羽柴勢を相手にしても一歩も引かない激戦を繰り広げていた。

「予想通り攻め込んできたか。敵と正面から当たるな、馬防柵を利用して敵の攻勢を凌ぐのだ。」

この円明寺川の明智川には多くの馬防柵が張り巡らされており、その為明智勢はそれを巧みに利用して秀吉の大軍と互角に戦っているのだ。もちろんその策を考えたも光慶だ。

「後はこのまま持ちこたえるだけですな。」

利三はそう言つて、各部隊を手足の如く操り秀吉軍と相對する。

一部隊で敵わなければ二部隊で、連携を取り合い秀吉の猛攻に耐え凌ぐ。

「若様の作戦成功まで耐え凌ぐのだ。」

「しばらく耐え凌げば、必ずや若様がやってくれるぞ。」

貞征と茂朝は自ら前線で槍を振るい味方の士気を高め、敵に耐えていく。

そのまま戦闘は膠着状態へと陥った。

しかし秀吉からすればこの戦が長引けば長引くほど、不利になることは明らかであった。

その為、秀吉は正午を過ぎた時点で羽柴秀長、神田正治等が天王山を目指して進軍した。

天王山を取れば明智勢の横腹を突く形になる。

そうなれば明智勢は苦戦に陥るだろうと考えたのだ。

確かにその考えは当たっていた、しかしそれを読まれているとも知らずに。

秀長と正治は天王山の頂上を目指して進軍していた。

この辺りは明智軍も兵を配置していなかったようで、スラスラ進めた。

しかし此处で羽柴軍を悲劇が襲った。

それは、頂上間近の山道を歩いているときであり、この先を登ればもうすぐ其処だという状況であった。

そして天王山の頂上に到着しようとしたとき、
バーーーーーン!!

鉄砲が放たれた。

それも一つではなかった、百発近くの銃弾が進軍中の羽柴軍を襲った。

「何事だ。」

秀長がそう叫ぶ。

すると一人の伝令がやってくる。

「明智軍の奇襲に会い、後方の神田軍は壊滅状態に追い込まれました。」

「何だと、するとすで明智軍は天王山に布陣していたのか。」

そうやって辺りを見回すと、いつの間にか明智の旗印である桔梗の紋が描かれた旗が羽柴軍を囲むように立っていた。

その時、秀長は察した。

此方は完全に策にはまったのだと。

「撤退しろ。」

秀長はそう叫んだ。

しかし、それを掻き消すようにまたしても銃弾が今度は秀長の軍に打ち込まれた。

しかも、先程と同じように百発近くの銃弾だ。

「これ程の数の鉄砲とは、さすがに耐えきれんな。」

それを喰らってはさすがに進軍できるはずがないため、撤退しようとしたとき。

『敵は策に落ちたぞ。かかれ。』

まだ幼さを残す高い声が響く。

そしてその瞬間、今まで隠れていた明智軍総勢三千が打って出てきた。

銃撃に続き、更なる奇襲に羽柴軍は大混乱に陥った。

有る者は明智軍に討たれ、また有る者は味方から押されて崖下に転落したりなど散々であった。

更に大将の秀長と正治も命からがら撤退した。

ここで、何故光慶の軍が此処にいたかと、大量の鉄砲の謎を明かそう。

それはこの戦が始まる、十一日のことであった。

光慶は光秀に一つの策を提示した。

「奇襲だと？」

光秀は思わず聞き返した。

この山崎の地は山岳地帯な為色々入り乱れてはいるがさすがに奇襲が出来るほどではない。

さすがにその策には諸将も賛同しなかった。

しかし光慶も唯の奇襲ではないことを告げた。

『父上、ではこの策はどうでしょう。』

そう言っ自信の策を書いた書を渡した。

そこに書いてあったのはこの戦の一通りの作戦であった。

『まず父上達にはいかにも遅れてきたように布陣していただきたいのです。』

「なるほど、そうならば敵は明智本隊を討つのに集中しますな。」
利三が光慶の言葉を繋いで言う。

この時点で利三は光慶の策に気付いたのだ。

『他の部隊は敵が動き出したのを見て、出撃してもらいます。』
そう言うって光慶は、自身の策を提示した。

「良かるう、この戦お主の策で行くとしよう。」

『ありがとうございます。』
そう言うって頭を下げる。

「ならばすぐにでも動き出さねば行けませぬ兄上。」

秀満がそう言うって立ち上がる。

それを宥めるように光秀が言う。

「待て秀満。して光慶、兵の配置はどうする。」

『それならば既に考えてございます。』

光慶が考えた布陣はこうである。

明智光秀・斎藤利三・阿閉貞征・溝尾茂朝の四名を中心に一万の兵。
この四名を明智本隊として、対羽柴戦線の主力となる。

そして、明智光慶に三千の兵。

光慶は敵が攻め込んでくると予想される天王山に鉄砲を百五十程持
たせて、秀吉本陣を奇襲するために布陣させておく。

そして明智秀満に三千の兵。

秀満には淀川付近で、敵の奇襲部隊を叩く。

数で劣っているため、鉄砲は二百ほど持たせておくこと。

最後に山崎長徳・妻木広忠に三千の兵。

二人には秀吉本隊の奇襲をしてもらうために迂回ルートを進んでも
らう。

これが光慶が考えた布陣であった。

そしてこれはそのまま布陣することとなった。

そして、この戦はまさに光慶の予想通りに進んでいた。

何故此処まで上手くいったかというと、理由は幾つかあった。

まずは細川家の協力があつたことだ。

史実では細川家は明智家に協力しなかったため、明智家は細川と筒井に押さえを置かなければならなかった。

しかし今回は細川が協力してくれているため、筒井の押さえを細川に任せることが出来たのだ。

そして、二つ目は時間の問題であった。

史実では敵の襲来を聞いてからの出陣であったが今回はそれ以前に準備して布陣していたため、かなりのアドバンテージがあったのだ。対する羽柴軍はどうだろうか、羽柴軍は十二日に到着していたとは言え、この辺りの地理を完全に理解しているとは思えない。

しかも、史実以上の明智軍の出撃に天王山を取れていない状態で会戦したのだ。

まさに史実と立場が逆転しているのだ。

三つ目は兵の数であった。

羽柴軍は丹羽軍と合流したため、二万四千の大軍となっている。

対する明智軍は筒井の押さえが細川が受け持っているため、光慶の三千の兵を加えた一万九千になっている。

二万九千VS一万九千、兵力差は一万。

しかし天王山の獲得に失敗した上、奇襲のため損害は多くその兵力差はかなり縮まっていた。

そして四つ目が鉄砲の数である。

この時旧織田家臣団の中で鉄砲を最も多く保持していたのは明智光秀であった。

その為鉄砲部隊が要所要所に配置されていて、羽柴軍の攻勢に耐えているのだ。

もちろん光慶の奇襲部隊も多くの鉄砲を所持している。

この四つの要因が光慶の作戦を手助けしているのだ。

『敵は怯んでいる、このまま秀吉本陣を強襲するぞ。』

光慶は三千の兵にそう告げて、下山を始めた。

天王山奪取失敗はすぐに両陣営に伝わった。

「光秀様、光慶殿の兵が天王山にて羽柴軍を打ち破ったそうぞござ

います。」

それを聞いた明智軍は作戦成功を知り士気を高めた。

「殿大変でございます。天王山占拠に向かった秀長殿と正治殿の部隊が明智軍の奇襲に遭い撃破されました。」

反対に羽柴軍は多少落胆の色が見えた。

しかし今はそんなことを気にしている暇ではない。

「なんじやと、すると敵は既に天王山を占拠しているということか。」

「

秀吉は悪態を付いた。

「更に敵は我が本陣に向けて進軍しています。」

それを聞いて、本陣にいる諸将は騒然となった。

いきなりのことに対応仕切れてないのだ。

「静まれ!!!」

長秀の声が響く。

その声の大きさのあまり、諸将は黙り込む。

「秀政は五千の兵を率いて敵と当たるのじゃ。」

「はっ!!!」

堀秀政はすぐさま五千の兵を率いて光慶を止めるために出撃した。

光慶は逆落としての利を生かして、五千の兵と二人の名将相手に互角

の戦を展開する。

『さすが秀吉。すぐに体勢を立て直してくるとは。やはり一筋縄ではいかんか。』

光慶は秀吉の立て直しの速さに感心しながら自らの槍を振るった。

光慶は槍は其処まで強くないが鉄砲を撃たせれば光秀譲りの腕前を發揮する。

「これが明智の若武者か、中々やりますな。」

逆落とによって地の利を生かした戦い方を此処得ている。

これは簡単にはいかないと思った。

秀政はこれまでになく慎重に指揮を執った。

第一話 山崎決戦（前編）（後書き）

後編は後日

第二話 山崎決戦（後編）（前書き）

一話一話の量が多いか？

第二話 山崎決戦（後編）

第二話 山崎決戦 後編

円明寺川での全面衝突は熾烈を極めていた。

明智軍は総大将明智光秀を始め、斎藤利三、柴田勝定、阿閉貞征、溝尾茂朝、伊勢貞興、松田政近、御牧兼顕など八人の武将達が戦線を支えている上、光慶が予め建てておいた馬防柵などが存在している。

対する羽柴軍は蜂須賀正勝を始め、高山右近、蜂屋頼隆、増田長盛、丹羽長秀、田中吉政、仙石秀久、福島正則、加藤清正、中川清秀などの十人が戦闘に参加しているのだ。

両軍は激戦を続けていた。

序盤は兵力の勝る羽柴軍が多少有利に進めていたが、天王山奇襲成功の報を聞いて明智軍の士気が上がり、更に自軍敗走の報を聞いた羽柴軍の指揮は落ちていたため、大きな差は生まれていない。

そして一番は総大将が前線に出ていることもあるだろう。

秀吉は本陣で全体の指揮を執っているが、光秀は前線で本隊のみの指揮を執っている。

それでは前線の士気は変わってくるだろう。

人間誰しも上司が見ているときは張り切るものだ。

とは言え、秀吉が悪いというわけではない。

ハッキリ言って、秀吉の方が大将らしいのだ行動をしている。

本陣で対応していた方が緊急時に対応できるからだ。

だが今回ばかりは状況が悪かった。

今回の指揮は光秀ではなく、天王山にいる光慶が取っているのだ。

天王山の地の利を生かし、敵の位置を把握してそれを旗を振るやら

鐘をならすやらで味方に伝えているのだ。

故に光秀は全面衝突を起こしている円明寺川に集中できているのだ。それがあつたため、数で劣る明智軍が互角に戦えているのだ。

しかし、その明智本隊に迫る軍勢が居た。

「此処を進めば、明智本隊の側面を突くことが出来るはずだ。」

そう言ったのは羽柴軍遊撃隊の大將である池田恒興だ。

彼らは五千の兵を率いて、明智本隊の側面を突くために淀川を沿うようにして進軍していたのだ。

「幾ら明智軍が頑張ろうと、これでお終いよ。」

池田元助もそう言う。それには共に軍を率いていた加藤光泰も同じであつた。

幾ら明智軍とはいえ、側面を突かれれば崩れることは間違いない。

そう確信して進軍を進めた。

そして淀川から円城寺川に入ろうとしていた時だつた。

茂みの中で蠢く影があつたが、羽柴軍は勝ちを確信していたためそれを見逃していた。

その蠢くものの正体とはもちろん明智秀満率いる明智軍であつた。

明智秀満率いる奇襲部隊の数は千。

その中で二百人が鉄砲を構えていた。

「光慶の言うとおりきおつたか。」

そう呟くと、右手を挙げる。

それは鉄砲準備の合図でもあつた。

そしてタイミングを見計らつて敵が接近した状態で秀満は腕を振り下ろした。

ダダダーーーーー！！

その瞬間二百丁の火縄銃が火を噴いた。

そしてそれは見事に羽柴軍を強襲する。

そしてその瞬間秀満と別の所で待機していた津田信春が声を上げた。

「かかれーーーー！！」

「おーーーーー！！」「」「」

騎馬隊に足輕隊が一気に混乱する羽柴軍五千の兵に襲いかかった。明智軍の奇襲部隊は三千といえ、鉄砲の先制攻撃と奇襲の混乱で部隊が機能していなかった。

これでは数の差など関係ない、羽柴軍の足輕は散々に打ち破られていく。

「しずまれー、静まるのだ。」

元助がそう叫んだがそんな声など通るはずがない。

しかもその声で自分の居場所を明智軍に知られてしまったのだ。

「これでも喰らうがいい。」

秀満は鉄砲を構え元助目掛けて打ち込む。

それは見事に元助に当たり、元助が地面に崩れ落ちる。

「羽柴軍大将、池田元助。この明智佐馬助秀満が討ち取ったり。率いている将が討ち死にしたことはすぐに広まった。」

その為混乱は更に大きくなり、潰走を始めた。

しかし明智軍もそれを黙って見ているはずがなく追撃を開始する。もちろん、その事実は何陣営に伝えられる。

「どうやら光慶の作戦通りに事が運んだようだな。」

光秀は一安心した風に言った。

幾ら優れた作戦だったとは言え、さすがに心配だったらしい。

そしてその報告を聞いた明智軍は更に勢いづいた。

それに対しては柴軍の士気は更に下がった。

「なんと、恒興の部隊まで壊滅したと。」

秀吉は信じられなかった。

先程の天王山での奇襲と言い、淀川での逆奇襲と言い全て裏をかかれている。

しかも恒興は織田家の中でも勇将で知られ、天正八年（1580年）に今は亡き信長に対抗して花隈城に籠城した荒木村重を破っている。そして時勢を見ることが出来る、織田家の中でも有数の武将ですら破れたのだ。

その為羽柴陣営に走った動揺は小さくはなかった。

「後は我らがこの円明寺川で羽柴軍の本隊を破れば此方の勝ちだ。」
先程の報告で形勢は完全に明智軍へと傾いていた。
兵力差の優位を發揮できていない羽柴軍に明智軍は果敢に攻め込んでいた。

「敵戦力は絞られた。全軍、突撃せよ。」

「『『『『『おおー！』』』』』」

光秀の号令に明智軍の兵士達は一気に突撃を開始した。

第二話 山崎決戦（後編）（後書き）

次回 激戦の山崎がついに決着。
秀吉に起死回生の策はあるのか。

第三話 決着山崎

第三話 決着山崎

二つの作戦を破られ、更に天王山方面と淀川方面から本陣が襲撃を受けていると知り、焦りと動揺が走っていた羽柴軍は突撃してくる明智

軍から防衛戦を維持するのは難しかった。

兵が多いと言ふことは軍としての能力も上がるが逆に混乱すれば立て直すのは容易ではない。

既に第一陣は破られてしまっている。既に数的優位はない、後は両軍の士気の問題となっている。

それを知った秀吉はすぐさま援軍を向かわせた。

「中村一氏、山内一豊。すぐさま本隊の援軍向かえ。」

「はっ！！」

中村一氏、山内一豊の二名はすぐさま三千の兵を率いて本隊への援軍に向かった。

秀吉は完全に焦りを感じていた。

此処まで明智軍が数多く集結しているとは予想していなかったからだ。

予想では細川と筒井の押さえに半数を向かわせると呼んでいたのだが。

「筒井と細川は何をしている。」

秀吉はそう叫ぶように言った。

筒井と細川のどちらかがこの戦に参戦していたら勝てたはずだった

からだ。

「報告によれば、細川は藤孝殿を中心に明智家への協力を決定し、筒井家に睨みをきかせているとのことで、筒井家も細川に睨まれては此方に来ることはないでしょう。」

孝高が秀吉にそう告げた。

「なんと！？藤孝が明智に着いたと。」

信じれなかった、あの知将が不利な状況にある明智家に組することなど。

「恐らくですが、藤孝殿は光秀の息子である光慶を可愛がっておりましたからその縁かと。」

「そうか、光慶が居ったことを忘れて追ったわ。」

それが一番の敗因だったのかも知れないと考えた。

そのころ天王山の麓辺りまで攻め込んだ光慶の軍は優勢に事を運んでいた。

何故五千と三千で優勢に戦えているのかということこの山の地形の所為であった。

光慶は鉄砲を持たせた部隊と弓矢を持たせた兵の合わせて五百の兵を少し高い山道に配置して掘軍の後方を狙い撃ちしたのだ。

それを喰らった掘軍はどんどん戦線を下げていって現在は何とか保っているという状況であった。

しかしこのままでは戦線を突破されるのも時間の問題であろう。

更にこの戦闘には淀川沿いから迂回した秀満軍が迫っているため、早急に手だてを考えなければならぬ状況なのだ。

「後一步で敵を突破できるぞ。気合い入れろよ。」

「此処を突破されれば、我が本陣は危うくなってしまう。皆の者、奮起せよ。」

秀政の叱咤激励と高い指揮能力で何とか食らいついでいる。

しかし秀吉本陣を襲う影はこれだけではなかった。

「秀吉は本隊救援に部隊を向かわせたな。これで俺達の勝ちだ。」

光慶は本陣から山内隊と中村隊が出て行くのを見てそう言って笑っ

た。

その言葉通り秀吉が居る本陣では大変なことが起きていた。

「敵襲。明智軍三千が迫ってきております。」

秀吉に一人の伝令から本陣襲撃が伝えられる。

「バカな。できは既に回りに回り込んでいたと言うことなのか。」

秀吉から驚愕の言葉が発せられる。

一豊等に三千の兵を持たせたため現在本陣を守る兵は二千しか居ない。

「これでは本陣が持ちませぬ。」

孝高が言う通りこのままでは本陣が落ちるだろう。

「秀吉覚悟。」

そう言つて長徳が槍を振るう。

更に広忠も今まで戦闘に参加できなかった鬱憤を晴らすべく、兵を進めていく。

二千の兵は果敢に攻め掛かったが鉄砲の餌食にされ、混乱を起こし出す。

本陣がこうなつてしまつては戦は負けたようなものだ。

「堀秀政隊、天王山にて明智光慶隊に敗走」

「淀川から迂回してきた明智秀満隊もそれに合流しております。」

「円明寺川にて我が本隊、明智本隊に敗走」

伝令から相次いで自軍敗走の知らせが届く。

「殿、此処はお逃げ下され。」

「じゃが、家臣達を置いて逃げるなど。」

「命あればいつか逆転の目は現れます。ですから今はお早く。」

孝高が秀吉に迫りそう言った。

いつか再戦をするにも秀吉無くては勝てないと見たからだ。

「すまぬ。」

秀吉はそう言つて馬に乗ると数百名の兵達を連れて逃走を開始した。孝高も全軍に撤退の合図を送る。

光慶の策によって明智軍は勝利を得た。

「勝ち鬨を上げる。」

『俺達の勝利だ。』

光秀と光慶がそれぞれの場所で勝ち鬨を上げる。

圧倒的戦力差からの逆転は、明智家に大きな効果をもたらした。

しかしそれは、史実との分岐点でもあった。

第三話 決着山崎（後書き）

あまり人気が出ないな。

報告（必ずお読み下さい）

報告

山崎の戦いにも決着が付き一段落したところですが。

この「明智家 天下統一への道」と「聖杯に導かれし者」をかいて
いる刹那ですが。

上記の二つの内一つに絞りたいため、後何話か連載しますので感想
を下さい。

それぞれの感想を見てそれで決めたいと思っています。

期限は一応八月の十日ぐらいとしたいと思います。

どうか感想宜しくお願いします。

現在明智家 天下統一への道は山崎決戦までしか書いていませんが
賤ヶ岳辺りまで書くつもりです。それに合わせて聖杯に導か
れし者も五話程まで掲載しようと思っています。
どちらかを選んで感想にお書き下さい。

第四話 同盟交渉

山崎で秀吉と長秀を破った明智軍は一時の安息を手に入れていた。しかし主要陣はまた明智家本拠地、坂本城に集まっていた。

更に今回は前回筒井家に睨みを効かせていた細川藤孝も来ていた。

「今回の勝利、誠におめでとうございます。」

藤孝をそう言つて深く頭を下げる。

「いえ、藤孝殿が筒井を押さえなければ今頃どうなっていたか。」

あの状況で筒井の参戦があつたら明智軍は挟撃される形になつていたはずだ。

そうなれば明智本隊が先に破られていただろう。

それを藤孝率いる細川一党は見事に筒井を押さえくれたのだ。

明智の諸将は細川に感謝していた。

「気にすることはございませぬ、私たちは光慶様に命じられてやっただけのこと。」

「それでも、藤孝殿が居らねば筒井を押さえるのは困難であつたことは明白です。」

「そのようなお言葉をいただき、誠にありがとうございます。」
藤孝の挨拶が終わつたが今回集まつたのはこれだけではない。

名将細川藤孝を加えた新明智首脳陣で今後のことを考えていたのだ。

「まずは秀吉、長秀の大軍を退けた我らでございませぬが、未だに四方を敵に囲まれていることには変わりございませぬ。」

利三の言う通り、今回の戦で力を大きく削がれた羽柴家はまた大丈夫だろうが丹羽長秀が帰参した柴田家は既に明智家への出撃を決定して、今はその準備をしているのだとか。

そして一番明智が危惧しているのは、新織田家の重臣滝川一益であった。

一益は清洲城で虎視眈々と主君信長の仇を討たんとしているのだ。

このままでは柴田家と織田家に挟まれるのは目に見えている。

『最悪の場合は筒井、鈴木と呼応しての一斉出撃ですな。』
光慶がそう言った。

その言葉は、この場にいる者達にはどういう意味かすぐに解った。
筒井家は兎も角、鈴木家はいつも織田家の脅威にさらされてきた。
織田家は鈴木に今後一切干渉しないことを理由に同盟を組むかも知れない。

「そうなってしまうえば、我らは一気に窮地に追い込まれますな。」
秀満は光慶の言葉を理解していった。

ハッキリ言つてそうなれば明智家はお終いだらう。
先の大戦で兵力を増やしたと言つても四家を一気に相手にするとなれば兵力の分散は避けられない事実。

筒井、鈴木の家は防げてても柴田、織田を防ぐのは難しい。

「ならば打開策は一つ。」

『筒井家と鈴木家への同盟ですね。』

「うむ。」

誰一人としてその案に反対した者は居なかった。

それしか手がなかったため仕方がないだらう。

しかし此処で一つ問題点が起きた。

「その交渉には誰が行くのですか兄者。」

秀満の一言で空気が固まった。

誰が行こう!!

それがこの場にいる者達に降り掛かった。

「あ、兄者。皆の者もどうしたのだ。」

いきなりの落ち込みように秀満が慌てる。

秀満は一応この中では頭が悪い方なので気付いていないらしい。

「筒井家は問題ないだらう。」

「はい、筒井は私が向かえばいいのですが問題は。」

「鈴木家か。」

そうである最大の難関は鈴木家なのだ。

長年のだけの脅威にさらされながら独立を続けてきた家なのだ。ハッキリ言つて柴田とかより始末が悪い、更に現当主の鈴木重秀は鉄砲の名手で鉄砲の腕に関しては右に出る者はないという。そして厄介なのが、重秀が雑賀衆の生き残りだと言うことなのだ。かつて信長の行つた雑賀攻めにおいては雑賀衆が鉄砲を駆使した奇襲戦法で織田軍を苦しめた。

最後は皆ごと焼き討つという暴挙にでたのだが、光秀の部隊がこっそり何人か逃がしていたのである。

その生き残りが重秀なのだ。

全員が唸っているときに光慶が声を上げた。

『その任、私にお任せいただけませんか。』

その瞬間この場に集まつた者の視線が光慶に集まつた。

その視線を受けても光慶は堂々と光秀を見つめる。

しばらくすると、光秀がフツと笑つて。

「良かるう。やってみせよ。」

そう言つた。

光秀は知っていた。

光慶は昔から一度決めたことは絶対に曲げないのだ。

恐らくこれ以上何を言つても意味をなさないだろう、そう考えたのだ。

その後筒井家には藤孝が、鈴木家には光慶が行くことになった。

第四話 同盟交渉（後書き）

感想宜しくー

第五話 鈴木家交渉

それから数日後、光慶は鈴木家を尋ねていた。

途中までは細川の護衛が居たがここからは一人で行かなければならない。

周りのものは護衛を連れて行くように言ったのだが、光慶は連れて行かなかった。

鈴木家を此方に引き込めなければ明智家は完全に窮地に立たされる。此方からお願いしに行くのに、護衛など必要ないと言ったのだ。

狂気の沙汰としか言いようがないが、光慶はそれで覚悟を見せるつもりなのだ。

それから少しして光慶は鈴木家当主との会談の許可があり、謁見の間に向かった。

「重秀様、明智からの使いが見えました。」

「うむ、通せ。」

光慶を案内した小姓が室内にいる重秀に伝えると、中から重意のものと思われる声が聞こえてくる。

声から考えて年齢は五十過ぎくらいだろう。

中にはいると上座に一人の青年が座っている。

そして今光慶が居る襖から上座にかけてまで、厳つい顔をした家臣達はずらりと並んでいる。

全員の視線が光慶に集まっており、凄まじいプレッシャーを与えている。

そのプレッシャーに押されながらもそれをおくびにも出さずに堂々とした様子で奥にいる重秀の正面まで歩いていく。

重意は14歳という若さにしてこのプレッシャーの中でも堂々と歩いてくる光慶に感心しながら、自身も無然とした態度で構える。

光慶は座り込むと正座をして礼節を守った態度で挨拶する。

『お初にお目に掛かります、明智光慶と申します。』

緊張やプレッシャーを感じさせない心の通った声を出す。

たった一人であるのに対して、周りを敵の家臣で囲まれている状況でこの態度を取れるのに周りの家臣達は感心していた。

「これはこれは、はるばる遠くからよくお越しになされました。」

『いえ、この程度の苦勞で我が家を救えるのなら。』

その言葉は含んではいるが率直にここに來た理由を言っていた。

光慶はもはや此方の策を隠す気はない、腹を割って話す。

それだけを考えていた。

「なるほど、して光慶殿がお越しになされた訳は同盟と言うことですか？」

試すような感じで話す重意。

何かあったときのことを考えて隣の部屋には腕利きの武士と鉄砲を持っただけが居る。

相手もこのことを理解しているのだろう、その事を踏まえてこの少年はどうするか。

それ次第と考えていた。

『ええ、鈴木重意様には明智家と同盟を結んでいただきたいのです。』

「しかし我らは、かつて織田家に雑賀の里を襲われたことがあるのをご存じかな。」

重意はその時、明智の部隊に救われたことを知っている。

しかしその事を持ち出すのであれば、この話を断るつもりで居る。

しかし、光慶はそれを持ち出さなかった。

『確かにそのような事件もありました。それでもです。』

しっかりと重秀の方を見ながら話す。

『私の話を断るならそれでも構いません。しかしこのままではいずれ明智も鈴木も滅びると考えています。』

「ほう、だが我ら鈴木は兎も角明智は滅びるとは思わんがな。それに誰が滅ぼす。」

この辺りの大名では一国だけで明智家に勝てるような大名家は存在

しない。

少なくとも重秀はそう考えていた。

『羽柴秀吉でございます。』

「秀吉だと？だが彼奴はお前等が破っただろう。」

何言ってるんだこいつという風な目で光慶を見る。

しかしそれでも光慶は、目をそらさない。

『山崎では此方に分がありました。しかし、秀吉のことです。すぐに西国を平定して来るでしょう。』

その考えは重意もあった。

あの秀吉がこのまま黙っているはずがない。

それと同時に重意はあることを考えた。

これだけのことが言える光慶に興味がわいたのである。

それで考えたことは。

「なるほど、なら賭をやってみないか。」

重意はそう言って、にやつと笑った。

場所を変更して訓練所。

基本は兵達が訓練を行うところなのだが、今回は二人のためだけに使う。

「勝ち負けは簡単だ、ここから三十間（約五十五メートル）先にある的を打ち抜ければお前の勝ちだ。」

『打ち抜ければ此方の話を了承してくれるのですか。』

「そうなりや考えてやるよ。」

重意はそう言うと言っていた鉄砲を渡す。

それを受け取った光慶は的に向けて鉄砲を構える。

しかしさすがに三十間はとてつもなく長かった。

当時の火縄銃は十五間（約二十七メートル）ぐらいを目安に撃っていた。

確かに三十間は届かない距離ではないが威力も精度もかなり下がる。それにこの時代での鉄砲の名手とされる者達でも当てることが出来

る人物は数人しかいないだろう。

父である光秀もかつて朝倉家に仕官したときは鉄砲による遠当てをしたと言う。

しかしその距離も二十五間（四十五、五メートル）で今回は更に十メートルも長い。

父譲りの鉄砲の才能があると言っても今回の成功率は低かった。

しかし光慶の心は穏やかであった。

完全に集中状態に入っており、その目は先程の温厚な少年は何処に行っただか鋭い瞳をしていた。

「（この坊主、良い目をしている。こいつの下でなら良いかもな。）

」

しかしそれもこの的当てが成功すればの話、失敗した者の下に付くほどお人好しではない。

静寂が訓練所を支配する、光慶にはその一瞬がとても長く感じられた。そして、

バァン！！

銃声が鳴り響く、そして的は。

奇麗に真っ二つに割れていた。

その瞬間、周りから一斉に歓声が上がった。

それは同時にこの場にいる者達が明智家への協力に賛同したと言うことだ。

そしてこの賭を持ち込んだ当の本人は、

「本当にやってみようとは、こいつならもしかしたら。」

口ではそう言っているものの心の中では既に答を決めていた。

光慶はと言うと周りの歓声に驚きながらも照れを隠すためか頭をポリポリかく。

そんな光慶に重秀が近寄る。

すると今までの歓声が嘘のように消え、静寂が支配した。

重秀は光慶の正面に立つと、片膝を付き臣下の礼を取る。

「我ら雑賀衆一党、光慶殿にお仕えすることを此処に誓いましょう。」

「ああ、宜しく頼む。重秀殿。」

両者はしっかりと手を握り、この瞬間鈴木家は明智家と同盟関係になり、雑賀衆は光慶の私兵として協力することになった。

筒井家の方も藤孝が話をつけてくれたらしい。

これで幾内最大の勢力は完全に明智となった。

今日を押さえている上にその周りの大名家達を味方につけたのだ。

これで明智家への進軍は容易ではなくなったからだ。

第五話 鈴木家交渉（後書き）

光慶の鉄砲のくだりは光秀が朝倉家で見せたものをもとにしています。

次回ついに賤ヶ岳の戦いに突入。

第六話 越前侵攻戦

明智家は筒井家、細川家、鈴木家と同盟関係になっており、それぞれが独自の軍事部隊を持っている。

それらを総括すれば五万強になるだろう。

それに比べて旧織田家家臣団を中心とした反明智連合軍は尾張に織田信雄二万強。

越前の柴田も多くて三万がやっつと。

そして先程の戦いで破った羽柴軍は一万程度だろう。

それに秀吉は先の戦闘の所為で当分動けない状況が続くはずだ。

現在警戒すべきは越前の柴田勝家だろう。

上杉家と和平を交わして現在この明智家へ侵攻の準備を進めていると言つ報告が忍からあつたからだ。

その知らせを受けた明智家首脳陣は再度坂本城に集結していた。集まつたのは光秀を含めた四人だ。

前回と違って各領地の守備に回っているため多くの将を呼べなかつたのだ。

まずは明智家当主の明智光秀、明智家重臣の筆頭家老斎藤利三、細川家当主細川藤孝、（本人非公認の）明智家次期当主明智光慶の四人だ。

「今日集まつてもらつたのは他でもない、現在我が家に侵攻してこようとしている柴田家のことと、尾張の信雄のことだ。」

織田信雄、それが現在の織田家の当主の名であつた。

本来ならば尾張の織田家を継ぐのは信孝の筈であつたが信孝は山崎決戦で秀吉と協力したのでその為敗走した信孝は尾張に帰れずその内に信雄が織田家の党首の座に着いたのである。

信雄は勝家と仲が親しかった為、今回の勝家の動きに何の反応を示さないのは可笑しかった。

『今回の合戦に絡んでくるかも知れませぬな。』

「うむ、そうなれば我らは虚を突かれることとなる。」
越前に兵を向けた隙に尾張から進軍を開始する、これまた読みやすい策ではあるが面倒なことには変わりない。

西の防衛のためには最低でも一万の兵は必要であろう。

そして勝家対策に三万程度。

そうなれば信雄対策に使えるのは一万がやっとと言つところであろう。

はつきり言つてこの戦力で信雄の相手をするのは難しかった。

信雄が急に家督を継いだと言つても織田家の正当後継者になっているため兵力は二万以上はいるだろう。

更に尾張には信長の残した精鋭部隊が居るだろう。

一万で抑えられるかが問題であった。

そしてそれを誰がやるかであった。

この守備戦は恐らく熾烈を極める戦いとなるだろう。

そして先の柴田家との合戦のため、主立った武将は皆、越前に向けて進軍を開始している。

残っているのは光慶と雑賀衆、そして少数の武将しか居なかった。

此処にいる者の中で光秀は賤ヶ岳の指揮に利三も藤孝もそれに従軍しなければならなかったため防衛に参加できない。

「私が参りましょう。」

「なんと、若殿が参ると言うことですか。」

利三が驚いたように声を上げる。

「この場にいるお三方は柴田家との交戦には絶対に必要な御方がた。ならばこの光慶、織田家対策に全力を持って打ち込みましょう。」

光慶はそう言つて光秀に迫る。

その顔から十五歳という年齢は感じられない。

あるのは強き信念と、凄まじいほどの迫力であった。

さすがは光秀の息子と言ふべきであろうか。

それに光秀は重々しく口を開く。

「良いだろう、光慶。お前に一万の兵を授ける。信孝の餓鬼を散々

に打ち破ってこい。」
そう言つて光秀は兵の手配を始めた。
尾張の清洲城から攻め込んでくる織田軍を迎え撃つのは一万の兵を
授けられた明智光慶だ。
光慶は伊賀の山中にある砦に守備兵を構えて攻め込んでくる織田家
を迎え撃つべく出発した。

天正十一年

山崎で秀吉を破つた明智軍は「逆賊追討」の元に明智家侵攻の準備
を進める柴田勝家に三万の兵を出した。
対する柴田軍は未だ和平の日が浅いせいか警戒のため一万の兵を残
して二万の兵を明智軍を迎討つべく軍を進めた。
そして明智軍の軍師である細川藤孝の策略によつて柴田軍の主力は
賤ヶ岳に集結していた。
時を同じくして尾張の信雄が二万の兵を動員して明智軍本拠地であ
る近江に向けて兵を進めた。
それを光慶等一万の兵が安土城で迎討つ形となり、三家の中に緊迫
した空気が漂っていた。

第六話 越前侵攻戦（後書き）

次回ついに決着。

第七話 決戦 賤ヶ岳

賤ヶ岳にて柴田軍と対峙した明智軍は軍の編成を進めていた。

「この戦、山崎以上の大激戦となりましたよぞ。」

「だろつな、敵も完全な布陣とは言えないが士気は高い。」

藤孝の言葉に光秀が応える。

柴田軍をおびき寄せられているため布陣はまだ完全ではない。

しかし主君の仇討ちとあってその士気はかなり高い。

それに対して此方の軍は作戦が成功したため布陣は完璧に整っている。

しかし士気の間では負けていると考えて良いだろう。

此方の布陣はと言うと。

まずは先駆けとして布陣させた明智秀満、猪飼昇貞、阿閉貞征、安田国継、松田政近らに一万の兵。

この部隊は敵部隊の正面に位置する部隊で精銳が集められている。

そして左翼を任されたのが斎藤利三、山崎長徳、明智光忠らに五千の兵。

この兵は敵右翼である前田軍、金森軍を押さえるための軍だ。

そして此方の主力を置いている右翼は細川藤孝、溝尾茂朝、肥田帯刀、肥田家澄、伊勢貞興、妻木広忠らの一万の兵。

此方は敵の侵攻を食い止めるための防波堤の役割を負ってもらったため、藤孝が指揮を執っている。

そして最後の後詰に明智光秀、蜂屋頼隆、仙台秀久率いる明智本隊五千だ。

蜂屋頼隆、仙台秀久の二名は山崎の合戦で捕らえられその明智に降ったのだ。

それらを加えた明智軍は総勢三万の兵で柴田軍と対峙した。

対する柴田軍は主だった者を本陣に集めていた。

集まったのは柴田家当主である柴田勝家、その勝家の甥である前田利家、勝家の養子である柴田勝政だ。

「あの男と戦うことになるうとはな。」

勝家はそう呟いた。

圧倒的な武力で制圧する勝家と巧みな戦略で敵を制圧する光秀。

そのどちらも織田家中でその名を知られた二人であった。

戦い方を違えど勝家は光秀のことを高く評価していた。

そしてその光秀が主である信長を討つたと聞いたときは大変驚いた。あの男が謀反を起こしたことが信じられなかったのだ。

信長のことを尊敬していた勝家は同じように尊敬していた光秀が裏切るとは思わなかったからだ。

「これも戦国の世の習わしでございましょうか、叔父上。」

そう言つて答えたのは勝家の甥である前田利家だ。

利家は武勇に優れており、柴田家の中でも重宝されるほどの腕前だ。更に知謀を低くはないためよく意見を聞かれるのだ。

「ですが父上この戦、負けられませんな。」

そう言つたのは勝政だ。

勝政は元は佐久間盛次の三男として生を受けたが、勝家に気に入られて養子となつたのだ。

「勝政の言う通りじゃ。この戦、勝たねば信長様に面目が立たぬ。」

勝家はそれを本心から言っている。

だが勝政の言つたことはそれとは違う。

此処で明智家を破れば一気に京に上り、畿内を制圧すれば天下を狙えるだろう。

勝政は恩がある勝家に天下人になって欲しいのだ。

勝豊はどうかは知らないが勝政は本心から勝家を慕っているのだ。

「それに現在信雄様も我らに呼応して近江を攻めているという。此処で我らが勝利し、近江で信雄殿が勝利すれば明智は潰えるだろう。それこそが信長差への恩返しと思え、皆の者。この戦絶対にかつぞ。」

「

「はっ」

勝家の呼びかけに二人が答え立ち上がる。

柴田軍の士気は最高潮となっていた。

しかしその頃、柴田勝豊の陣営で動く不穏な影があった。

四月十六日、ついに両軍が賤ヶ岳で睨み合う形となった。

柴田軍二万と明智軍三万。

山崎と違い数では此方がかっているが今回は敵が地の利を生かして攻め込んでくるだろう。

そうなれば此方も油断は出来ない。

先に動いたのは勝家ではなく光秀であった。

光秀が先に動いたのには理由がある。

この戦が長引けば近江で戦う光慶に負担が掛かる。

更に長引けばこれを機に裏切りを行う者も現れるかも知れない。

そう考えた光秀は軍を前進させた。

それを見た勝家も同じように軍を進める。

「先駆けにかねての通り伝えておいた作戦を使わせる。」

それを聞いた伝令が先駆けの陣営に伝える。

それを聞いた秀満は先駆けの部隊に指示を出す。

「昇貞、国継、政近は六千の兵を率いて前進しろ。その他の者は私に付いてこい。」

「御意」

三人は六千の兵を率いると勝家率いる中央の軍に兵を進める。

「まずは、我らの出番だな。」

そう言つて政近が槍を持って言う。

「あまり出過ぎるなよ、あくまでこれは勝家の部隊を他の部隊から引き離すのが目的なのだからな。」

国継が言う。

「その為にも此処で気張りましょうぞ。」

昇貞がそう言つて二人を元気づける。

そしてそれを見ている勝家も黙ってはいない。

「勝光、秀現は儂に続け。長頼は此処を守っておれ。」
そう言うとな勝家は五千の兵を率いて進軍した。

それを機を同じくして右翼の藤孝は肥田帯刀、肥田家澄、伊勢貞興の三名に進軍を命じていた。

三名に与えられた兵力は五千。

敵左翼も五千ほどの軍勢、これならば互角の戦闘になるだろう。
事実左翼の敵を殲滅する必要はない。

要は柴田勝家一人を討ち取ればいいのだ。

その為光秀は両翼の兵を敵への牽制用としておいたのだ。

その作戦のため、明智軍左翼も同じようなことが起きていた。

利三、長徳、光忠の三名は前田軍を相手に小競り合いを続けていた。
必要以上に攻め込まず、膠着状態を続けているのだ。

つまり両軍の両翼は膠着状態に陥っていたのだ。

そうなれば自然とこの戦の行く末を決めるのは中央で戦っている部隊に掛かってくる。

「全軍、此処を打ち破れば光秀は目の前じゃ。」

両翼の膠着を知った勝家は中央が打ち勝てばこの戦に勝利できると考え突撃を敢行する。

その考えは間違いでではなかっただろう、他の者でもそうした可能性はぬぐえない。

その為この行動を咎める者は居ないだろう。

だがこの突撃により光秀の策に掛かったことは確かであった。

本陣でその突撃を見ていた光秀は馬上でニヤリと笑った。

「どうやら敵は此方の策に掛かったようだな。合図を鳴らせ。」

光秀がそう命令すると陣太鼓の音が響いた。

それを機に明智軍右翼が動き出した。

それを知らずに勝家は部隊を率いて突撃を続けていた。

さすがは勝家が誇る精鋭部隊と言ったところか。

連なる敵を撃破しながら進軍していく。

既に六千の兵の半数が打ち破られ後退していた。

その突撃はまさに鬼の如く。

鬼の柴田の名に恥じぬ姿であった。

それからまもなく六千の兵は打ち破られ後方に布陣していた四千の兵と向かい合った。

むろん勝家はこの四千の兵にも突撃を開始した。

四千の兵を率いている秀満は奮戦していたが押され気味である。

それを聞いた前田隊も突撃を開始しようとしたが利三による鉄砲隊の牽制で思うように進めないでいた。

「我らが此処を押さえねば作戦の成功はないぞ。」

利三自身も鉄砲を持ち前田隊に打ち込む。

しかし前田隊を率いているのは織田家の中でも有数の勇将である前田利家だ。

「槍の又左」で知られる前田利家の部隊は斎藤隊の鉄砲をかいくぐりながら前進する。

斎藤隊も後退しながら何とか耐えているがいずれ打ち破られるだろう。

その前にこの作戦が成功しなければ明智側の勝利は難しくなる。

その頃勝家率いる本隊は中詰め隊を蹴散らしていた。

「鬼柴田が突撃、見よや！！」

鬼柴田と恐れられた勝家を先頭に柴田軍は進軍を続けていく。

「勝家様に続け、鬼柴田が意地見せてくれようぞ。」

佐々木盛政が味方を鼓舞するように叫び突撃する。

「くっ、耐えきれんか。」

秀満率いる中詰め隊は柴田軍の突破を許してしまつた。

中詰め隊を蹴散らした柴田隊はそのまま明智本隊へと軍を進めた。

そして明智本陣では光秀が戦鬪の準備をしていた。

「殿。敵は中詰め隊を破り、現在本陣に接近中との報告です。」

そう言ってきたのは明智本陣の守備をしていた仙台秀久だ。それを聞いた光秀はさしも気にした風もなくしていた。

「殿。我が隊に出撃の命令を。」

秀久がそう言つて詰め寄る。

すると光秀は手入れしていた火縄銃を置いた。

「この光秀が考えも無しに突撃を許したとおもつたか。」

「それはどういふ」

事でしょうか、そう言いたかつた秀久の言葉を遮るように本陣の左側から何処かの部隊が柴田隊に攻め込む音が聞こえた。

「動いたか、藤孝よ。」

そう言つて、光秀は立ち上がる。

そして秀久の方を向いて、

「秀久、出撃の指揮を執れ。」

「はっ」

出撃の命令を受けた秀久はすぐさま走つていった。

本陣の兵は光秀が命令していたので既に準備完了している。もちろん蜂屋頼隆もいる。

既に前方では突撃してきた柴田隊とその横腹を付いた細川隊の戦闘が起きていた。

それを見た秀久はすぐさま命令を下した。

「全軍、敵は此方の策に落ちた。今こそ全力で敵を討つときだ。皆の者掛かれ。」

「「「「「おおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」」」

その声と共に仙台隊は柴田隊に突入した。

明智隊を突破した勝家率いる柴田隊は本陣に向けて突撃していた。

しかし途中で右翼にいたはずの細川藤孝率いる細川隊五千の兵の襲撃に会い足が止まったところに一番最初に蹴散らしたはずの先駆け隊が

戻ってきて退路を断つようにして突撃してきたのだ。

これだけでも厄介なのだが更に正面から明智本陣の部隊を率いてきた仙石隊からも攻められ三方から攻撃される形となってしまった。これはかつて信長が姉川の戦いで士氣の高い浅井軍を打ち破った策と同じである。

そうなってしまうてはいかに強い柴田の精鋭達とはいえどうにも出来なかった。

「なんとしても耐えよ。利家達が来るまで耐えるのじゃ。」
そう言つて勝家は部下達を鼓舞する。

もちろん勝家が敵の罠に掛かったことは前田隊にも届いていた。

「すぐに叔父貴を助けに行くぞ。」

そう言つて利家は軍を進めようとする。

しかし光秀がそれを許すはずがなかった。

秀久突撃のすぐ後に光秀によって上げられたろしの合図によって次の作戦が実行されていたからだ。

それは一人の伝令によって伝えられた。

「伝令。柴田勝豊殿が明智方に寝返りました。」

「なんと、それは本当か。」

利家は驚いて聞き直す。

利家が驚いたのは無理もないだろう、勝豊は勝家の養子であるのだ。そんな彼が柴田から明智に裏切るとは思っていなかったのだ。

だがよく考えるとと思う節はある。

勝豊はよく優秀な勝政と比べられていた、それが原因であるのかも知れない。

「更に、勝豊殿率いる部隊は既に我が後方に迫っております。」

「すで後方に回っているのか。これでは戦にならん、一度退くぞ。」

そう言つて利家は後退を始めていく。

その後、前田隊の撤退によって戦線を崩された柴田軍は総崩れとなり各個撃破されていた。

利家も捕縛され、勝家自身も命からがら北ノ庄に逃げ帰った。

柴田家家臣団を光秀は自らの家臣とした。

そして越前の守りに秀満一万の兵を置いて自らは残りの兵を率いて安土へと帰った。

第七話 決戦 賤ヶ岳（後書き）

とりあえずこれで一旦投稿は終了です。

一応次の安土攻防戦も書いていきますがそれは感想の結果次第で決めたいと思います。結果次第では此方が駄目でも掲載のみはするかも知れません。

報告続

前回報告で感想で存続させて欲しいという声が多かった方が連載されると言いましたが。

お気に入り数が多い場合でも感想の声次第ではお気に入り数が少なくても連載するかも知れません。

その為感想の程を何とか宜しくお願いします。

さらには明智家 天下統一への道の主人公明智光慶を聖杯に導かれし者に出せと言うような感想が来ればそれも検討します。

逆は難しいですが何とか頑張りたいと思います。

何はともあれ八月十日までが期限ですので八月十一日になってから届いたものはカウントしませんので。其処の所は宜しくお願いします。

途中経過

八月三日までに皆様から届いた感想にの数は七つも来ました。その内三つが継続を希望する者です。と言うわけで、現在の途中経過をお伝えします。

明智家 天下統一への道

一票

聖杯に導かれし者

一票

このような結果となつていますがまだ七日間ありますのでどんどんお送り下さい。

しかしこの二つを掲載して分かったことはFateファンが多いと言ふことですな。

このサイトを見つけてから一ヶ月ほどしか経っていませんが友人を含めてFate作品がどれだけ知られているかがよく分かりました。とりあえず期限間十日までですのでそれ以降は向こうとさせていただきますので其処の所をお間違えなく。

途中経過（後書き）

存続の要望が来たこの作品ですが。

要望の一つに光秀のことが書いてありましたのでそれについての話を書こうと思っています。明智光秀が本能寺襲撃を決意する話や他にも要望があれば書こうと思います。要望があれば宜しくお願いします。

結果報告

八月十日までのアンケートの結果が出ましたのでその報告と今後の活動について記しておきたいと思えます。

結果は聖杯に導かれし者がなんと十票。

明智家天下統一への道が四票という結果になりました。

この結果をもちまして今後聖杯に導かれし者を定期的に連載したいと思えます。

明智家の方は不定期的に連載したいと思っております。

一応両方とも終わりまで行かせるつもりですのでご愛読のこと宜しくお願いいたします。

とりあえず今日、最新話を両方とも掲載するつもりです。

第八話 安土城前哨戦

賤ヶ岳で明智本隊が合戦をしている時、時を同じくしてこの安土の地でも合戦が行われようとしていた。

近江に攻め込んだきたのは現在織田家を継いでいる織田信雄だ。

信雄は柴田勝家と裏で密約を結び勝家と共に明智家を攻めるつもりだったのだ。

しかし此処で大きな誤算が起こった。

明智家への出撃を目前にしていた時に明智家の襲撃を受けたのだ。

それを聞いた信雄は急いで近江へと急いだ。

信雄の作戦では柴田方面に釘付けになっっている内に手薄な近江へ進出して制圧することだったのだ。

しかし信雄が近江へ進出した時点で既に明智家の桔梗の紋が描かれた旗が立っていた。

「ばかな、既に明智の軍勢は近江に集結していたのか。」

信雄はそう言っただけで周りを見渡す。

まさに所狭しと桔梗の紋を描いた旗が立っている。

数だけでは此方より上かも知れない。そう考えさせてしまうほどの軍勢だった。

これを見て信雄は家臣団を集めて軍議を行った。

「殿、このまま坂本城に向かうのは得策ではないかと。」

そう言ったのは重臣の岡本良勝であった。

良勝はかつて信長に仕えていたが本能寺の変後は信雄に身を寄せ、信孝が居ないうちに信雄を大名にした張本人である。

良勝はこの近江一帯を制圧した後は自らがこの地を治められるように賄賂を送っているのだ。

しかしさすがにこの軍勢を見たせいか、迂回する案を出している。

「敵をしかと確認してからの方がよいと思いますが。」

彼は蒲生氏郷、織田家の中でも随一の名將に数えられる存在だ。

彼も信長亡き後は信雄をもり立てるべく馳せそんじたのだ。

彼は敵をよく観察してから向かうべきと主張した。

しかし良勝はそれに反対する。

「今此処で敵と対峙している内に柴田殿が破られてしまつてはそれこそ我らはお終いぞ。」

「勝家殿が敗れるとおっしゃるのですか。」

「そうではございませんが、もしもの場合を考えねば。」

此処で迂回をして安土城へと向かう案とこのまま直進して坂本に向かう案で別れた。

双方の議論は延々と続くかと思われたが此処で信雄が下した命令は、「我らは坂本城を迂回して安土城へと攻め込む。その後坂本城を攻め近江を制圧する。」

「ははっ」「はっ」

信雄の命令にはさすがに逆らえないのか反対派も渋々ながらしたがった。

しかし蒲生氏郷はもしもの時を考えて二千の兵を持つて後方には位置することにした。

もちろんこれは良勝が邪魔な存在である氏郷を追いやるためだ。

良勝のような権力欲の強い者は氏郷のような純粋な忠誠を誓う者が嫌いだった。

対して氏郷も権力を好む良勝のことを毛嫌いしていたため両者の関係は拗れに拗れていた。

氏郷が後方に布陣したことに満足しながら良勝は信雄と共に馬を進める。

この迂回で敵の裏をかければ今回の合戦の功績は高いだろう。

そうなれば更に権力を持つことが出来る。

と言うある意味尊敬できるほどの権力欲を持つ良勝は自分の作戦の成功を信じて疑わなかった。

だがこの時すっかりと軍議をすべきであった。

織田軍が迂回していくのを茂みのなから一人の男性が見ていた。

『敵は予定通り、迂回していったか。』

その正体は現在この近江の守備を預かっている明智光慶だ。

光慶は敵が迂回するのを確認しに此処まで来ていたのだ。

もちろん先程の旗を立てるように命じたのも光慶だ。

実は先程のおびただしいほどの明智家の旗は偽旗、つまりは偽兵の策であつたのだ。

偽兵の策とは兵が居るように見せて敵の氣勢を削ぐなどの効果や他には今回のように敵の侵攻ルートを代えたりするためにも使われる策だ

。光慶は安土城へ誘導するためにこの策を使ったのだ。

『この程度の子供だましに引つかかるとはな。』

光慶は呆れながらそう言った。

上様、信長様ならどうであつたか。恐らく此方の策を読み切り直進していただろう。

もしくはわざと敵の策に乗りその後で策にはめただろう。

これで完全に分かつた。

『信長亡き後の織田家に未来はない。』

光慶はそう呟かずには居られなかつた。

しかしこうしている暇はない。すぐに安土城に帰り兵を収集せねばならないのだ。

光慶も馬に乗り安土城を目指す。

賤ヶ岳の戦いの最中、安土の地で光慶は長篠以来の鉄砲戦術を披露することになる。

しかしそれはまだ信雄等の知るところではなかつた。

第八話 安土城前哨戦 (後書き)

頑張って天下統一まで続けたいと思います。

第九話 光慶の策

光慶が帰った安土城では迂回してくる織田軍を迎え撃つべく軍議が行われていた。

敵は物見の話では二万弱、此方の兵力は賤ヶ岳の方に兵を割いたため一万の兵しか居ない。

しかし、此方には細川家から来た者達が居る。

鈴木家から来た雑賀衆などが多くいる。

戦力の面では負けてはいないと言えるだろう。

それでもこの戦は苦しい戦になるだろう。

『やはり雑賀衆の鉄砲を最大限に利用しなければな。』

光慶がそう言うのと周りの者もそれに賛同する。

確かに武勇に自身がある者もいるがこの戦力差では個人の力では敵わない。

「ついにおれの出番かい。」

重秀もそう言つて銃を持つ。

重秀は時期雑賀衆棟梁としての期待が高く、鉄砲の腕前も高い為、

重意から鉄砲集団の長として送られてきたのだ。

重秀は光慶に物怖じ消せず話するため光慶も気に入っていた。

『今回の戦いは防衛戦だ。敵の殲滅が目的ではない。』

「狙うは敵総大将。」

「それ以外は無視してもかまわんのだな、光慶。」

光慶を呼び捨てにしたのは賤ヶ岳で戦っている細川藤孝の息子、細川忠興である。

忠興は光慶が細川家の元で軍学を学んでいるときに親しくなり、光慶の姉である玉子ガラシヤ姫が忠興と結婚することになり兄弟の愛

柄なのだ。

とは言え一応主家の嫡男であるため礼節を持っているが基本は砕け

た話し方である。

『ええ、それにこの安土の地形は山々が連なり入り乱れている。其処を突けば数で劣る俺達でも勝機はある。』

「その為にも鉄砲隊の配置が鍵になるな。」
鉄砲隊を最大限にまで生かす方法は、やはり敵を引き込んだ上での奇襲作戦しかないだろう。

つまりそれは敵を引き込むための部隊が必要になるのだ。

それは容易ではない。

敵にはあの蒲生氏郷が居るのだ。

彼が居る限りこの様な策に引つかかる確立はほとんど無いだろう。

『全く、嫌な敵が来たものだ。』

光慶は溜息を付きながら愚痴る。

しかしそんなことを言っても現状が改善されるわけでもない。

しかし此処で悩む三人に朗報が舞い込んできた。

「光慶様、敵の配置が確認できました。」

そう言っただけで入ってきたのは光慶の配下の忍びであった。

光慶は甲賀の忍びをお抱えで雇っているのだ。

その為この近畿はもちろんのこと、各大家家の動きを逐一報告してくるため光慶の元には膨大な量の情報があるのだ。

更に今回は甲賀忍でもかなりの忍者が信雄の動きを監視しているのだ。

この忍者には信雄の軍の布陣を監視させていたのだ。

「光慶様が警戒されていた氏郷殿は、本隊から離れた後詰めとなっております。」

『何？それはどういう事だ？』

光慶の疑問はもっともなことであった。

先程も言っていたように氏郷は織田家の中でもかなりの重臣だ。

それを後方に追いやるなど、いくら何でも愚かすぎる。

「そう言えば、信雄と氏郷は大変仲が悪いと聞きましたな。」
忠興がふと思いついたように言う。

それについては草の者からも報告を受けている。

『なら、それを突かない手はないな。』

光慶がニヤリと笑った。

第十話 野戦の策略

後方に控える氏郷は現在の織田家について考えていた。亡き信長様の仇を討たんと出陣したことは良しとしよう。

しかしその為に領民に高い税を布き、国内の混乱も収めぬままでの地まで出陣した。

確かに敵の機先を制するために迅速に動くのは悪くない。

だが敵の情報を知らずして突き進むのは上策とは言えない。

先程の分かれ道でも少しばかり確認すべきではないのだろうか。

偽兵の計と言うことも考えられたのではないか。

今の織田家に未来はない、それならば。

「馬鹿な、私は信長様の作ったこの家を捨てるわけには。」

だが氏郷の心は大きく揺れ動いていた。

やはり信長討ち死にの報告の後では心が動揺するのであろう。

更に最近では織田家の中でも疎んじられるようになってきたことも大きいだろう。

そこに、明智からの使いがやってくる。

安土へ続く平地で織田軍二万と明智軍五千が向かい合った。

明智軍五千を率いるのは細川忠興だ。

忠興が率いているのは精鋭五千であり。

それに対して攻めての織田軍は信長亡き後主力を欠いた部隊ではない。

しかし戦力差は四倍。

更に平地での戦は数で決まると言われている、既に勝敗は決しているに思われた。

しかしそれでも明智軍は悠然と向かい合っていた。

「さすがに二万ともなると、凄まじいものだな。」

忠興は織田勢の布陣を見て言った。

しかしその言葉の中には焦りの心は微塵にも感じられない。
まるで自分たちが勝つかのような言い方だ。

対する織田勢本陣では諸将が軍議を行っていた。

「敵は小勢、正面突破で打ち破りましょう。」

良勝は正面突破を進言する。

それを周りの諸将は黙ってみている。

本来ならば此処で氏郷が他の案を提示するのだが後方に布陣させたため此処には居ない。

その為良勝の作通り正面突破に決定した。

しかし良勝は気付かなかった、既に罠に掛かっていることなど。

それからまもなく両軍は衝突した。

さすがの忠興は騎馬を用いた攪乱戦術で何とか持ちこたえている。

しかしさすがの精鋭部隊も数の差にはギリギリと押されつつあった。

対する織田勢は信雄指揮の下、正面突撃を行っているが忠興の戦術の前に犠牲を増やしているだけだった。

しかし正午を過ぎた時点から数で勝る織田勢が少数の明智勢を押し始めた。

「さすがに押さえきれんか。退くぞ!!」

忠興の命令で鳴らされた陣太鼓を合図に明智勢が撤退を始めていく。
むろんこの撤退も光慶の作戦だ。

「敵は逃げ出したぞ、追え!!追うのだ!!」

良勝の声が響き、織田勢が明智勢を追撃していく。

織田勢からすれば明智勢はほうほうで撤退しているように見えるが実際は規律の取れた動きである。

しかし明智勢は既に決められていたルートを通り、上手く織田勢をおびき寄せることに成功する。

追いかける織田勢は逃げる明智勢を追い立てながら既に安土城へと続く山中へ来ていた。

第十一話 激戦 安土城

元々標高の高い山に造られた安土城は攻め落とすどころか白に到着するのにも一苦労な山である。

その為自然と織田勢の足取りは遅くなってくる。

しかしそれは明智軍も同じ事なのだが、生憎明智軍は二手に分かれて山を登っているのだ。

片方は織田勢を引きつけたまま山を登り切る部隊。

その部隊は体力自慢の集まりでそう言った訓練を事前にさせて置いたのだ。

そしてもう片方の部隊は脇道に逸れ、それから迂回をして織田勢の横から攻め込む位置にいるのだ。

そんなこともつゆ知らず、織田勢は山中を駆けていく。ただし蒲生隊は少し遅れてから登っている。

「敵さんのおびき寄せには成功したな。」

鈴木重秀こと雑賀孫一が言う。

孫一とは元々雑賀衆の長が名乗る習慣があったため、次期頭領である重秀は既にその名を受けていて、既に雑賀衆を率いているのは彼と言っただろう。

そんな孫一は安土城へと続く山中に身を潜め三千の鉄砲隊を率いて潜んでいる。

もちろん雑賀衆を中心とした鉄砲のスペシャリスト達である。

そうこうしているうちに撤退してきた明智勢が鉄砲衆の間を通り抜けていく。

もちろんそれを追う織田勢も同じように進んでいく、そしてそれを確認し狙いをつけた瞬間。

「テメエ等、一斉に撃ちまくれ。」

孫一の号令と共に数千の銃弾が一斉に織田勢に降り注ぐ。

通常は縦から敵を押しつぶすように撃つのだが、彼らは斜めから撃

つことで敵にまんべんなく撃ち込んでいるのだ。
つまり「斜行隊形」である。

その為織田勢は一気に戦力と、氣勢を削がれることとなる。

「馬鹿な、此処で奇襲だと。」

「陣を立て直すのだ。」

信雄と良勝の号令もむなしく織田勢は混乱を起こす。

此処で良勝は気付く、全て作戦であったのだと。

其処にさらなる凶報が飛び込んで着る。

「伝令、蒲生氏郷殿が明智側に寝返りました。」

その報告はボロボロになった織田勢を一層疲労させた。

「おのれ、氏郷め。やはり敵に通じておったか。」

ここぞとばかりに悪態を付く良勝。

それは織田軍主力が鉄砲の雨を喰らう少し前である。

作戦通り少し遅れて山を登る蒲生隊は明智側から送られてくる合図

を待っていた。

そして銃声と共に狼煙が上がる。

それを見た氏郷が叫ぶ、

「これより我らは明智に付くぞ。全軍突撃せよ。」

その言葉と共に蒲生隊が織田勢に向けて突撃する。

そして其処に。

『敵は怯んだぞ、突撃!!!』

正面から部隊を再編した光慶軍が一気に坂を駆け下りて迫ってくる。

さらには、

「敵は混乱を起こしたぞ。今こそ好機。」

撤退したはずの忠興も織田勢の横腹を付いた。

三方から攻められた織田勢は支えきれなくなる撤退していく。

こうなつては完全に光慶のペースである。

偽兵として潜ませておいた明智勢に織田勢の行く手を阻むために火をつけさせたのだ。

「これは悪夢か。二万の軍勢が。」

信雄は信じられなかった。

数の差では圧倒的に此方の有利だったはずなのだ。

それなのに完全敗北にまで持って行かされた。

信雄自身も命からがらに何とか逃げ切れたぐらいなのだ。

つまりこの戦の勝敗は既に決定した。

この戦の被害、明智勢 死者 二百人

負傷者 二千人 (主に平地での戦闘)

織田勢 死者 三千人

負傷者 一万三千 (内五千が捕虜)

と言った圧倒的なまでの被害の差であった。

これが光慶が初めて総指揮を執った合戦であった。

これが後世に伝わる有名な「安土攻防戦」である。

光慶が外交的な手腕と巧みな戦略で戦った戦である。

第十二話 四国遠征 前編

賤ヶ岳、安土の戦いを終えた諸将は戦のため祝えなかつた新年の宴を少し遅れてするために安土城に集まっていた。

もちろんこれまで戦に出ていた諸将も殆どが集まっている。

まずは明智家当主明智光秀、それを支える重臣の斎藤利三、明智秀満。軍師である細川藤孝、そして本能寺の変以前から使っていた明智家家臣団、柴田勝定 阿閉貞征 溝尾茂朝 伊勢貞興、松田政近、御牧兼顕、妻木広忠、山崎長徳、溝尾茂朝、肥田帯刀、肥田家澄、明智光忠、安田国継、猪飼昇貞、木村吉清、並河易家の面々に加え今年は更に細川家と鈴木家、筒井家と柴田家から降った前田利家、織田家臣団だった蒲生氏郷等も来ている。

「皆の者、今日はよく集まってくれた。」

光秀が集まった諸将に声をかける。

諸将等も話すのを止めて光秀の言葉に聞き入る。

「今日はいつもよく働いてくれていて皆に休んでもらうため無礼講だ。」

そう言つて杯を掲げる。

それに合わせて諸将等も杯を掲げる。

「乾杯だ。」

そう言つと全員が酒を飲む。

そしてその瞬間から諸将が談笑を始める。

光秀も利三や秀満等と飲んでいる。

光慶はそれを少し酒を嗜みつつ眺める。

そして不意に視線を横にやると長徳が既に酔っているのか踊りを披露していた。

周りの諸将はそれを笑いながら見ている。

御三家の面々も同じように酒を飲んでいる。

新しく明智家に入った者達も全員此処に集められている。

そうすることで内部でのすれ違いをなくすためだ。
全員が笑顔で宴会をしている。

しかし、それはたった一人の使者の言葉により無くなる。

一人の使者がダンドンと音を鳴らして走ってくる。

そして光秀の前に来ると膝を付いて、

「長宗我部元親様より書状が届いております。」

「元親から？」

光秀は長宗我部より書状が届いたことが意外であった。

現在明智家は四国の大半を支配している長宗我部家と同盟関係にあった。

その理由は光秀の妹の娘である小少将が元親の側室として嫁いでいることにある。

その為長宗我部家と明智家の仲は織田家家臣時代から良いのである。その元親が書状を寄越したと言うことは四国の地にて何か動きが見られたと言うことだろうか。

周りの家臣団達も先程の騒ぎが嘘のように静まりかえっている。

書状を開き光秀が内容を読む。

少し読み進めると光秀の顔が鋭くなる。

そして書状を読み終えると家臣達に口を開いた。

「中国の毛利軍が四国に侵攻を始めたようだ。」

光秀の言葉は小さかったがこの場にいる全員の耳にしっかりと聞こえていた。

毛利が四国に侵攻を始めた。

この報告を樂觀してみることが出来るものはこの中にはいなかった。かつて羽柴秀吉率いる織田家の中国遠征部隊に苦戦を強いられた毛利家は本能寺の変の後、国力回復に努め無視できないほどになっていた。

更に四国が落ちれば明智家は中国と四国の二路からの攻撃に備えなければならぬ。

未だ東からの備えが十分ではない現状では此処で長宗我部家が支配

している四国が落ちるのは死活問題となっていた。
幾ら四国の殆どを制圧したといえども毛利に比べれば完全に劣っている。

このままでは四国が毛利の手に落ちるのは時間の問題だろう。

「しかし殿、現在我が家ですぐにでも動ける部隊は少のうございませぬぞ。」

現在明智家には前の決戦の所為で動ける部隊が少なく信長が打ちだした兵農分離の制度により兵が迅速に動けるようになったとは言えやはり現状はそんなものだ。

明智本隊も最低でも一週間の準備が必要である。

「すぐに動かせる兵力は五千と言ったところですよ。」

「五千か、ならばその兵を先発隊として送り込むべきだろう。」

「ならばその任、私にお任せ下さい。」

光慶がそう言つて光秀の前に出る。

「若殿ならば我らが救援に来るまで持ちこたえられるでしょう。」

利三の言葉に多くの賛成者が出る。

山崎の決戦の時といい安土の地を守りきつたなどの功績は旧臣達も認めずにはいられないほどであった。

と言つても旧臣の殆どが光慶のことを認めていたのだが。

前田利家などの柴田家から同盟条件として降つてきた家臣達も光慶の活躍を聞いていたため半信半疑ながらも賛成した。

「良かるう、光慶はすぐさま五千の兵を率いて長宗我部の援軍に向かえ。」

『はっ』

こうして光慶の長宗我部救援戦が始まることになる。

姫路城まで撤退した秀吉から奪い取った石山御所、つまりは後の大阪城が建設される場所に光慶は来ていた。

此処は城が築かれているのではなく、屋敷の周りに砦を築きそれを防御に使っている状態だ。

しかし本願寺はこの地の利を生かし大量の鉄砲を使い徹底抗戦した。その結果信長は苦しめられることになったのだ。

秀吉に備えて近々此処に堅城を築く予定があるが今回は長宗我部の救援に向かうための軍備を整えた上でどの様なルートで進むかを決めていた。

集まっているのはまず四国遠征軍先発隊総大将の明智光慶。雑賀衆の頭領、鈴木重秀。光慶直属の家臣、蒲生氏郷の三名だ。

四国遠征において決めておかねばならないことがある。

敵の攻め手、つまりは毛利軍であるが彼らは統率が取れた水軍を使った水上戦を得意としている。

しかし今回は四国に残った長宗我部に反抗する大名家の手引きにより既の上陸作戦を終え、陸上戦へと戦法を変更している。

ただし上陸部隊は三万の大軍、長宗我部には一万の兵がいるがそれでは防ぐには難しいはずだ。

「水上戦ならば我らは信長様がお作りになられた鉄鋼船を率いて敵を殲滅できますが。」

「陸地に上がれば船は使えねえからな。」

長宗我部の兵力は多く見積もって一万五千程度だ。

そして此方の兵力は五千。

合わせても二万程度、それに対して四国に攻め込んできた毛利軍は四万の大軍勢。

明智本隊の援軍が来れば逆転できるだろうがそれまでは二倍の戦力を相手に戦わなければならない。

はつきり言って勝ち目は薄い。

これまでのように上手くいく可能性は多くて四割。

『だが、四国が落ちれば話がけは大打撃を受けることになる。』

ゆえに、勝たねばならないと言って立ち上がる。

『四国に向けて出陣する。』

「はっ」

第十三話 四国遠征 後編

五千の兵を率いて四国の長宗我部の援軍として来た光慶達を迎えたのは香宗我部親泰であった。

親泰は長宗我部国親の三男で元親の弟である。

現在長宗我部家の中核を担う人物で軍事面だけではなく内政面でもかなり達者であり、元親からの信頼は厚い。

「我が名は香宗我部親泰と申します。明智殿の此度の援軍誠に感謝します。」

「いえ、盟友である長宗我部殿の危機とあればすぐにでも駆けつけます。」

そう言つて二人は挨拶を交わす。

「あと少しで日も暮れましょう、城に案内いたしましょう。」

「感謝します、慣れぬ船旅で気分を悪くした者も多くございますので。」

元々内陸地であつた明智家の領地で生活していた家臣達や兵達の何人かは既に気分を悪くしている。

その為すぐに行動することは難しい、親泰の心遣いを受け入れ勝瑞城に入った。

そして兵達に休養を取らせた光慶は親泰と現在の状況を尋ねるために訪ねた。

「現在の情勢をお尋ねしたいのですが。」

「そうですね、現在毛利軍は反長宗我部連合軍であつた豪族の手引きを受けて湯築城に入城しました。」

それを聞いて光慶は苦虫をかみつぶしたような顔をした。

毛利軍が今治港を占領したと言つことは聞いた。

それから考えて湯築城が毛利軍の占領下にあることは考えていた。しかし実際に占領されているとかなり劣勢になつてしまふ。

現状はかなり後手に回つているだろう。

「現在我らは川之江に城を築き、毛利の侵攻に対抗しております。川之江城は戦鬪用に作られた支城であるが四万の大軍勢を相手にしたら長くは持たないだろう。」

其処に一万の兵が籠もっており元親も其処にいるという。

『ならば我らも合流して川之江で毛利軍を迎え撃つことになりましたね。』

「援軍が間に合うかがこの戦の決め手となりましょう。」

『ならばまずは敵の攻撃の手をゆるめる必要がありますな。』

「何か手がお有りか。」

『ご安心を……』と言つことでございます。』

「なるほどな、それならば敵の攻めての勢いは緩まるでしょうな。」

光慶が何を提案したかは解らないが既に策が出来上がっていることは解る。

四国戦役、毛利包囲作戦と呼ばれる戦はここから始まった。

その数日後、何度かの野営を繰り返して光慶は川之江の支城へとたどり着いた。

毛利軍は現在湯築城で四国制圧に向けての軍議と軍備の準備をしているはずだ。

それから考えて決戦となるのは一週間後となるだろう。

それからどれくらい耐えきれぬかが問題だ。

本気で攻められれば二日と持たずに陥とされるだろう。

「久しいな、光慶。」

『お久しぶりです、叔父上。』

二人は親しそくに挨拶を交わす。

光秀が婚姻を行ったときや講和に向かったときに何度か付いていったときに面識があるため比較的友好的に会合した。

川之江には長宗我部の主力が集結しているため多くの陣地と砦を築いて毛利に備えている。

しかしこれでも圧倒的な数を誇る毛利軍を破るのは不可能だろう。

『現在の全体図を知りたいのですが。』

「そうだな、現在は。」

川之江は雲辺寺山、腕山、三傍示山と三つの山に囲まれた地で、其処に築かれた川之江城は南北朝時代からの城である。

敵の総大将は元就の三男であり、小早川家の当主である毛利随一の名將小早川隆景。

更に水軍大将村上武吉は有名な村上水軍の頭領である。

足輕大将として国司元相が騎兵大将として吉川元長が従軍している。更に赤穴盛清、三沢為清、清水宗治、中島元行、乃美宗勝が従軍している。

数は四万の大軍勢、敵は湯築城で軍備を整えている。

敵の進路は四国を西進してそれから南下して東進する時計回りで制圧していくルートを通るだろう。

西進すれば現在活発に動いている島津と相対する可能性がある。

毛利は現在九州の雄、大友宗麟と睨み合っている。

更に此処で島津を相手にするような真似はしない（出来ない）だろう。

それ故に西進する上で無視できないのがこの川之江城だ。

此処で時間を稼げば相手を倒すことが出来るだろう。

その為の籠城なのだ。

籠城＝敗北のイメージが強いがこの頃までは籠城して勝利を得るというケースは少くない。

それには援軍が必要になるが今回は明智の援軍が来る予定になっている、つまり籠城としては非常の有利なケースとなっているがまずは耐

えなければならぬ。一つの城を取られただけなら良いが二つも城を取られると中々覆すのは難しい。

それから何度か軍議を行ってそして数日後、ついに毛利軍が動いた。

城にわずかな守りを残して四万の兵が川之江城に向けて出陣した。その情報を忍の者によって手に入れた光慶は川之江の守りを元親に任せると自身は五千の手勢を率いて川之江から姿を消した。元親は毛利軍の接近を知ると各砦に伝達しある秘策を授けた。さらに光慶の命令で川之江の砦にある兵器が運び込まれていた。それを知ることなく毛利軍四万は悠然と進軍していた。

毛利本陣

四万という大軍を率いているため隆景は川之江に陣を築いていることを知っても大して気にとめなかった。

敵は一万足らずの小勢、それに多少の砦程度では耐えきれぬはずはない。

そう思いながら本陣で偵察の兵からの報告を聞いていた。

「更に敵は明智の援軍が到着したようです。」

「明智の者か？して、援軍の将は誰だ。」

「明智光慶と申す者にございます。」

それを聞いた隆景は大笑いした。

「たかが明智の小倅程度が入った位で我が軍を止めることなどできようか。」

これまで多くの敵を破ってきた隆景は光慶程度など大して気にもとめていなかった。

悪しき噂は広がれど、良き噂は遅して広がらずとはこの事である。

もちろんそうなるように光慶自身がそう流しているのだが。

「隆景様、先陣はこの私に。」

そう言ったのは騎兵隊長である吉川元長である。

隆景の兄、吉川元春の嫡男で優秀な人物であり隆景も気に入っている。

「良かろう、元長。赤穴盛清、三沢為清を連れて進め。何なら川之

江も落としても構わんぞ。」
そう言っている。

しかしその言葉を聞いて国司元相は驚いた。
そんなことをすれば功績に走る将達が出てくるだからだ。
そんなことをすれば軍律など無くなってしまう。

しかしそんな元相を隆景はさして気にもせず話を進める。

そして明日、元長率いる一万を先陣、つまりは第一陣として進めた。
さらに第二陣に国司元相を大将に中島元行、乃美宗勝を従軍させ六
千の兵を進ませた。

そして毛利本隊は隆景率いる二万の精鋭達。

後詰めに村上武吉が続いた。

第十四話 決戦の予兆（前書き）

半月ぶりの更新です、どうもすいませんでした。

第十四話 決戦の予兆

数で勝る毛利軍は最前線の砦を守る久武親直を撃ち破りその他幾つかの砦を撃ち破り、前線の砦は完全に制圧されていた。

「ははは、敵は大軍に驚いて逃げ出していったのだらう。食料や武器を残していったぞ。」

長宗我部軍が残していった食料などを集めて荷台に載せて本隊の到着を待つ。

緒戦は毛利軍の完勝に終わった、しかし元親や光慶等は着々と策を進めていた。

そんなことを知るよしもない毛利軍は本隊が到着すると第一陣はすぐさま出陣した。

毛利軍は手柄を立てるために先陣切って突っ込んでいく。

それに対しては元親は自らが戦場に出て兵の士気を高めていた。

「この地で我らが敗れるようなことがあれば領土は荒らされ、毛利の支配に置かれるだらう。」

元親は兵等を見渡しながら演説する。

「敵は我らの二倍以上、四万という大軍を持って攻め入ってくる。

しかし我らは勝たねばならぬ。」

砦防衛のため集結した者達は皆揃って元親の演説に聴き入る。

元親は部下からの信頼は絶大で、忠臣が多く居る。

「既に俺の甥、光慶も動いている。そして此方にはこれがある。」

そう言うと元親は幕を下ろし、光慶からもらった物を兵達に見せる。それを見た兵達は驚きの声を上げる。

今まで見たこと無い物だからだ。

鉄砲などは比喩ものにならないほどの破壊力を持つこの兵器は信長が独自のルートで南蛮人から手に入れた兵器であった。

敵の目は正面に向いて此方のことなど全く気にしていない。圧倒的な戦力差で押しつぶす物量作戦は指揮さえ崩してしまえば此方のものだ。

生憎敵の本隊はまだ到着していない、今なら撃てるだろう。

「全軍、敵を蹴散らすことだけを考える。そうすれば後は殿がやってくれらるだろう。」

そう言うと、弥次兵衛は兵達に声を出させずに突撃した。

「何事だ！」

元長が叫ぶように言う。

「敵の奇襲です、既に側面に布陣していた三沢為清隊は壊滅状態、三沢殿も混乱の最中敵に討たれました。」

その報告はあつという間に毛利軍全体に伝えられた。

その為毛利軍は混乱に陥った。

敵はどこから来るのか、どれほどの数なのか。

その恐怖や不安が毛利軍を襲い、先程まで連戦の所為で士気も最悪。幾つかの小隊は撤退すら始めている。

そして其処に元親が一気に責め立ててくる。

「全弾撃ち尽くす覚悟で撃つていけ。」

混乱を起こした毛利軍に櫓や砦から一気に銃弾を撃ち込んでくる。

大軍の上大混乱を起こした毛利軍は面白いように倒れていく。

それにはさすがに参った元長は撤退を始める。

「弥次兵衛は側面より迂回しろ。」

「お任せ下され。」

そう言うと弥次兵衛は迂回して毛利軍本隊の後方と思われる場所まで向かっていく。

「おうテメエ等、アレもってこい。」

毛利本隊

毛利本隊が砦を出発しようとしていた頃。傷だらけの足軽が陣内に駆け込んできた。

「伝令、先行した毛利軍は敵の奇襲に遭い敗走を始めました。」
その報告を聞くと諸将の顔が引き締まり大将である隆景の指示を待つ。

「先行した一万の兵を破るとはさすがは長宗我部元親と言うことか。」
隆景はそう言うときすぐさま諸将に指示を飛ばす。

「ならば俺自身が先頭に立とう。」
その言葉を聞いた国相はすぐさま諫める。

「た、隆景様。我らは一萬が破られたと言っても、まだ我らには三万近い兵が居るのです。」

「黙れ国相。明智の小倅に嘗められてたまるか。」

「ですが、もう日も落ちます。慣れぬ地での夜間移動は危険でございます。」

「くっ。………良かろう。」

隆景はやりきれない気持ちながらも私心で部下を危険に合わせぬ為踏みとどまる。

しかし隆景は憎らしそうに砦の方を見つめた。

だが明朝早くに長宗我部の兵を討つために出撃した毛利軍は砦に攻めかからんとしていた。

だが、

「隆景様。いくら何でも砦が静かすぎませんか。」

国相は長宗我部の砦が異常に静かなことに違和感を持つ。

「確かにな（既に引き払ったか）。」

隆景は何やら嫌な予感がするも砦内部に侵攻する。

中には人影一つ無く、人馬も引き払い武器兵糧全て運び出されていた。

既に後退したと考えるか、それとも敵の策と考えるか。

普通は敵の策略と考えるのが普通だろう。

だからこそ此処で策はないと読む。

「（もし此処で我らを撤退させたとしても湯築城で体制を整え再侵攻されれば防ぐのは難しい。

そしてその頃には明智の援軍も本国に帰国しているはずだ。

そうなればまず長宗我部が毛利の侵攻を防ぐのは八割方不可能。

だからこそ、戦力の整っている今だからこそ。」

『全兵力を持つて』

山中に身を潜めた光慶が呟くように言う。

「決戦を仕掛ける」

元親が後方の陣で言葉を繋ぐ。

「これからが、本当の戦だ。」

隆景は刀を抜いてそう言う。

第十四話 決戦の予兆（後書き）

次回、四国の覇権を賭けた一大決戦。
ただし試験期間中なので更新は期待できません。

第十五話 四国終戦

天正十一年。

八月二日、西国の雄。毛利の侵攻によって始まった四国侵攻戦、後に言う四国戦役である。

緒戦は毛利軍の怒濤の侵攻で前線砦は壊滅。

しかしその後の中央砦での戦闘で長宗我部軍が毛利軍を奇襲に成功する。

とは言ったものの、形勢はまだ完全に毛利側に傾いていた。

しかし長宗我部の陣営には桔梗の紋の旗が靡いているとは毛利軍が知るよしもなかった。

決戦に備えて英気を養っていた毛利軍に思わぬ報告が入る。

湯築城からと思われる伝令が息を切らせて本陣に入ってくる。

「で、伝令。湯築城が陥落いたしました。」

その報告は本営に集まっていた諸将に一気に伝わった。

そしてその衝撃は計り知れないものとなる。

「占領したのは何処の軍勢か。」

隆景は努めて冷静に尋ねる。

「旗印は桔梗。明智の軍勢かと。それと長宗我部の旗も同じ程度ありまして、数は一万弱と言ったところかと。」

その報告は毛利軍諸將を動揺させるには十分な効果であった。

数は此方が圧倒的に上であり、敵の二倍近くの兵力を控えさせている。

しかし挟撃されては潰走しても可笑しくないのである。

隆景は決断を迫られていた。

決戦か撤退か。

つまりは一拳玉砕覚悟で決戦を挑み敵を破れば四国は此方の手に落ちる。

しかし此処で敗北すれば毛利は衰退の一途を辿るだろう。だが此処で撤退すれば敵の追撃を受けて多大な被害を被るかも知れない。

それに幸いに正面の砦に居るのは一万の兵のみ。ごり押しで行けば恐らく此方が勝つことが出来るだろう。

それならばこの作戦は疾さが一番になってくる。

疾きこと風の如くとな。

とりあえず作戦は決まった。

「皆の者、退けば敵は挟撃を行い我らを殲滅せんとするだろう。

それ故に我らは正面から敵に当たり川之江の城を奪取し、それから四国征伐に乗り出すつもりだ。」

それを聞いた諸将はすぐさま自分がするべき事を考える。

「死中に活を求めよ。敵を撃ち破り毛利の名を天下に轟かせるのだ。」

「くくくおう！！」「くくく」

何故湯築城が陥落したのか。

それは毛利軍が殆ど出払い、老兵数百が残っているだけだったので光慶は奇襲に成功した弥次兵衛と合流して中央砦に誘い込み連絡を絶たせた状態で陥落させたのだ。

両軍合わせて八千の兵力、まともには戦えば勝ち目がないので彼らは湯築城の守備に就き、時期を待つ。

そして戦場は既に動き出していた。

川之江城を目指して進軍する毛利軍の前に巨大な陣が立ちふさがった。

砦、いや違つ。まさに野城。

長篠を思わせるその野城はとても巨大で毛利軍の兵達に衝撃を与え

た。

しかし、兵力は一万程度。

そう思い、隆景は陣列を整えた軍勢に指示を出す。

「中央の敵に国司元相を大将として赤穴盛清、三沢為清のに名を副将として付け一万の兵を持って当たれ。」

「承知しました。」

「右翼の敵に村上武吉を大将に乃美宗勝を副将とし八千の兵を授ける。」

「ははっ」

「左翼の敵には兄上を大将に清水宗治を副将とし七千の兵を預けます。」

「お任せあれ」

「そして儂が五千の兵を率いて中島元行と共に湯築城の敵に備える。」

「了解しました。」

さすがは毛利随一の名将であるため布陣に隙はない。

この兵力差でこの布陣に攻め込まれたら間違いなく滅びることになるだろう。

そして五千の兵が湯築城の敵に備えることで後方からの奇襲をなくす。

布陣としては最高の形である。

しかし元相はその話を聞きながら何故か不安を感じていた。

何故かとは言えない、あえて言うなら武士の感である。

つまり長年戦場で過ごしてきたため殺気などの類にはなれている。

しかしこれ程不安を覚えた戦いはない。

しかし此処で命令に反すると軍律が乱れてしまう。

なるべく味方に被害が出ない状況で撤退するしかない、そう思った。だが、運命は毛利を破滅へと誘うことになるのは、大国毛利が衰退する原因になるうとは誰も思いはしなかった。

正午前に布陣を果たした両軍は決戦の時を迎えていた。

戦力は毛利軍三万と連合軍一万＋援軍。

毛利は敵の戦力を一万と見ているため余裕の表情である。

そして正午、決戦の火蓋は切って落とされた。

出撃の法螺貝の音に応えて毛利軍の三つの部隊が突撃を始める。

「かかれー」

「我に続け」

「全軍突撃」

三人の大將の号令で本格的に兵士達が突撃する。

敵の妨害はなく一気に野城の近くまで突撃する。

しかし兵士がおかしな事に気付く。

平地が盛り上がったところがあり、登るのには一苦労するほどの小山になっている。

そしてそれが幾つも作られているため兵が自然と分担され、更に通路が狭いため自然と一列か二列になってしまう。

そしてそれは何処の部隊も同じでその為部隊間の連携が取れなくなっている。

しかし後方で指揮を執る將軍達はそれを知るよしもなく進軍を進めていく。

そして先頭の兵が迷路状の通路を抜けるその先にはなんと、竹束が置かれており其処には無数の刀や槍が此方に向けて突き出している。先頭の兵はそれを回避しようとしたが後ろから押されているためはつきり言って避けようがない。その為先頭を走っていた兵士の何人かがその犠牲となってしまう。

そしてそれが振動で伝わり明智の陣地に敵の来襲が伝えられる。

その瞬間通路を飛び出て敵に攻め入ろうとしている毛利軍に千を越す鉄砲の雨が降る。

無論先発隊はボロボロである。

死傷者自体は大したことはない。

しかし進めば銃弾の雨を喰らう、それを考えると進む気になる者は居ない。

しかし後続の部隊から押されて自然と前に押されてしまう。

そしてそれを連合軍の鉄砲が狙い撃ちにする。

そして兵達の一人が敵陣の旗に気付く、それは。

「き、桔梗の紋。明智だ。」

そしてその兵はその言葉を最後に命を落とした。

その言葉は一気に広まり、兵士達を恐怖に誘う。

しかし勇敢な兵士達はなんと土の壁をよじ登り前に進もうとする。

だがそれは格好的であり、銃弾の前に負傷し動けなくなる。

兵士達は恐怖に駆られ逃亡しようとする。

しかし前は敵後ろは味方に挟まれて逃げることなどできない。

そして兵は倒れていく。

逃げることも敵わず、進むことも敵わない。

明智鉄砲戦術「殺し間」の前に毛利の兵も士気もドンドン下がって

いく。

しかしこの通路状態では先のことなど見えるはずがない、後方から

続々と兵は進んでいく。

元々この時代の火縄銃の命中率などたかが知れている。

一般兵で三割、あの鉄砲の名手明智光秀ですら七割り程度だったという。

しかしこの場合は違う、狭い通路に撃ち込んでいくだけなので命中率は格段に上がる。

更に鉄砲には命中しなくても恐怖感を与えることが出来る。

そして運良く通路を抜けても深い堀と急斜面の壁、石なら上れるだろうが砂で出来ているため滑って全く上れない。

其処に総勢五千以上の鉄砲が火を噴くので毛利勢はたまったものではない。

「かの長篠でもこれ程の鉄砲を用いなかったというのにな。」

「地形が長篠程良くないからな、堺の商人と雑賀衆に頼み込んでこれだけ集めたのだ。」

元親と光秀は敵を鉄砲で蹴散らしていく味方を眺めながら言う。

そして、

「さて、仕上げと行くか。」

光秀がそう言う頃には毛利勢はボロボロで戦意など欠片もなかった。

「全軍、これより追撃戦にはいる。」

「『オオー！』！」「『』」

そして連合軍は一気に突撃を敢行。

戦意の欠片のない毛利軍の前線は脆くも崩れ落ち、更に援護を行うはずである本隊も湯築城から出撃してきた光慶等と戦闘を繰り広げていて援軍を出せる状況ではなかった。結局毛利軍は敗走、幾人もの犠牲を出しながら命からがら撤退していった。

戦闘結果

毛利軍

死者 一万人（内五千が殺し間）

負傷者 二万五千人

死亡武将

清水宗治、中島元行、乃美宗勝

結果

明智勢の勝利

第十五話 四国終戦（後書き）

次から第一章の最終決戦になります。

第二章はまさかの展開！！

よろしければどうぞ。

第二章は来年になるかも知れません。

第十六話 進軍岐阜

四国の防衛に成功した明智家は意気揚々と自領に帰還していた。毛利を徹底的に叩いたことですぐには立ち直れないだろう。

九州の島津とも密かに同盟を組んでいるため九州からの侵攻もない。まあ、島津も大友や龍造寺との大戦を控えているから敵を作りたくないのだろう。

そうなるのと直面の問題は越後の上杉と東海の徳川。

上杉は現在同盟関係である柴田家と、その旧家臣団が守っているため越前や越中が落ちることはないだろう。

播磨の羽柴の抑えは八上城に波田野の家臣団が守っている。

八上城は自然の要塞だ、滅多なことで落ちることはない。

そうなるのと最終的には東海の徳川、尾張の織田となるだろう。

恐らく織田信雄は徳川家康を引つ張り出してきて進軍してくるだろう。

そうなれば戦場になるのは小牧長久手になるだろう。

兵力を考えればだが、とは言え。

徳川に対して備えなければならぬのは事実であり、その為は今岐阜進行のための準備をしている。

と言っても岐阜城の城主である滝川一益が降伏してきており、岐阜城に入城次第、徳川との決戦を行う次第だ。

三河

岡崎の城の一室に二人の男性が居た。

一人は徳川家当主である徳川家康。

そしてもう一人は

「殿、織田から書簡が来ております。」

家康に過ぎたるものが二つある、唐の兜に本多忠勝。その本多忠勝である。

戦国一の武と称される槍の使い手である。まさに歴戦の戦士と言ったように堂々たる姿である。

両者は織田から逆賊明智を討つように協力せよと書簡が来ている。失礼極まりないが、織田には幾つかの恩がある。

何にせよ無視は出来なかった。

「忠勝よ、お主はどう思う。」

家康は忠勝の意見を聞き入る。

「恐れながら申し上げます。明智の勢いまさに天にも昇る勢い、正面からあたるは危険。」

されどこのまま織田がつぶされれば我らは単身明智に挑まねばならなくなります。

そうなれば勝つのは非常難しく、これを幸いとして真田が明智と組み、南下してくるやも知れませぬ。」

確かにそうである。

このまま行けば家康は非常に危険な位置に立つことになる。

真田が何故此方に攻め込まないか、それは兵力が少ないからだ。

明智の支援を受けた昌幸が甲斐から南下し駿河を攻め、尾張から明智が侵攻する。

そうなれば敗北は必須。

「ならばその前に討つしかないか。」

「さようでございます。」

「忠勝よ、尾張まで出撃するぞ。」

「ははっ!!!」

岐阜に入城した光慶等はすぐさま国境の防御を固めた。

現在真田とは講和をされていて双方不進の契をたてている。

「光慶よ、この戦どう見る。」

光秀が光慶に対してそう尋ねる。

すると光慶はいつもと比べて神妙な顔つきで言葉を返す。

『この戦、凄まじいものとなるでしょう。』

「その通りだな、しかし我らは勝たねばならんだろう。」

光秀は光慶だけではなく諸將に言いかけるように言う。

「無論我らも尽力しますぞ。」

「兄上、この秀満も全力で当たる覚悟。」

「我が知謀、この戦で振るいましめようぞ。」

「我が武、敵を蹴散らし。殿に勝利をもたらせましよう。」

「知勇を持って敵に当たりましょう。」

利三や秀満、藤孝などの古くからの家臣団が光秀の周りを固め、

「我が筒井も全力を尽くしますぞ。」

「我ら雑賀衆も鉄砲の腕遺憾なく発揮しましょう。」

筒井、鈴木がそれを盛り立て、

『父上、我が隊も全力を。』

「御父上のために細川の全力を。」

「光慶の旦那のために全力を尽くすぞ。」

「主に見せられた夢、それを果たすまで死にませぬ。」

光慶とその家臣団がそれを支える。

まさに明智は一大強国として有能な家臣団を持ち、それを遺憾なく震える国となっていた。

「つむ、皆の者よ。出撃するぞ、敵は尾張の織田信雄、東海の徳川家康だ。」

ついに、中央の覇権を賭けた最終決戦が始まる。

第十六話 進軍岐阜（後書き）

今回ののはかなり短めです。

このあたりで切らないと、不自然な形となりますのですいません。
小牧長久手はまさかのラストが待ち受けています。

第十七話 静かなる始まり

天正十二年

三月の初め、岐阜のある北に布陣した明智軍。

時を同じくして小牧城に入城し、西に織田勢を置き、南に布陣した徳川織田連合軍。

両軍は睨み合い、まさに一大決戦の雰囲気漂っていた。

これを後に言う小牧長久手の戦い、小牧の役、長湫戦役である。

両軍の戦力は明智軍総勢八万、連合軍六万。

数だけならば明智側の優位であった。

この戦の初めての戦は明智勢が仕掛けた。

溝尾茂朝、伊勢貞興、松田政近の三名が家康の陣付近に布陣し、榊原隊と交戦したのだ。

この戦いは八幡林の戦いと呼ばれ、結果は引き分け。

双方大した戦果を挙げることなく引き上げた。

次に手を打ったのは家康であった。

米津常春、渡辺守綱、蜂屋貞次の三名に敵左翼との戦闘を命じた。

しかしそれは光秀の知るところとなり、奇襲を受けそうになるが渡辺守綱のとっさの機転で撤退し戦闘らしい戦闘は起こらなかった。

こう言ったような戦闘もあり、両軍は陣営を整え広範囲に布陣した。

明智陣営

「明日、連合軍に対して決戦を仕掛ける。」

光秀が静かにそう告げた。

その言葉を聞いた諸将は一層顔を引き締め光秀の言葉を待つ。

今明智本営にはこの戦で指揮を執る主立った将が全員集まっている。
「敵は日の本一と言われた甲州兵に一步も退かず戦った三河兵だ。
この戦は限りなく苦しい者となるだろうが、諸将が指揮を執り全力
で当たれば勝てぬ相手ではない。
皆、これより明日の決戦の布陣を言い渡す。」
光秀がそう言うのと藤孝は中央の机に小牧の地図を置き、其処に諸将
の名が書いてある木片を置いていく。

明智光秀 兵力三千 本陣総大将
明智光忠 兵力二千 本陣守備隊 旗本衆

斎藤利三 兵力七千 中央対徳川大将
柴田勝定 兵力三千 中央対徳川先駆 足軽頭
阿閉貞征 兵力三千五百 中央対徳川先駆 騎馬頭
溝尾茂朝 兵力二千五百 中央対徳川左備 足軽頭
伊勢貞興 兵力三千 中央対徳川左備 鉄砲頭
松田政近 兵力二千五百 中央対徳川右備 足軽頭
御牧兼頭 兵力三千 中央対徳川右備 鉄砲頭
安田国継 兵力三千 中央対徳川中備 騎馬頭
山崎長徳 兵力三千五百 中央対徳川中備 鉄砲頭
明智秀満 兵力四千 中央対徳川副将

細川藤孝 兵力六千 右翼対織田勢大将 軍師
溝尾茂朝 兵力五千 右翼対織田勢副将 足軽頭
肥田帯刀 兵力四千 右翼対織田勢先駆 騎馬頭
肥田家澄 兵力四千 右翼対織田勢中備 鉄砲頭
妻木広忠 兵力三千 右翼対織田勢遊撃

徳川軍

徳川家康	兵力三千	本陣総大将	
服部正成	兵力二千	本陣守備隊	旗本衆

井伊直政	兵力四千	中央対明智大将	騎馬衆
------	------	---------	-----

本多忠勝	兵力五千	中央対明智中備	騎馬衆
------	------	---------	-----

松平康忠	兵力三千	中央対明智左備	足軽衆
------	------	---------	-----

平岩親吉	兵力三千	中央対明智中備	鉄砲衆
------	------	---------	-----

鳥居元忠	兵力三千	中央対明智右備	足軽衆
------	------	---------	-----

大久保忠世	兵力三千	中央対明智右備	鉄砲衆
-------	------	---------	-----

高木清秀	兵力三千	中央対明智左備	足軽衆
------	------	---------	-----

酒井忠次	兵力四千	左翼織田援護	足軽衆
------	------	--------	-----

米津常春	兵力二千五百	遊撃隊	騎馬衆
------	--------	-----	-----

渡辺守綱	兵力二千五百	遊撃隊	騎馬衆
------	--------	-----	-----

榊原康政	兵力千五百	岩崎城守備隊	足軽衆
------	-------	--------	-----

蜂屋貞次	兵力五百	岩崎城守備隊	鉄砲衆
------	------	--------	-----

織田軍

第十七話 静かなる始まり（後書き）

ついに始まった第一期最終局面。

史実と違い連合軍は全軍出陣という状況。

兵力差は二万、両雄が小牧の地にて激突する。

次回、血染めの決戦

第十八話 決戦

ついに両陣営の布陣を終えた。

小牧山を睨む形で布陣する明智軍。

鶴翼の陣を敷く明智軍を睨み、同じく鶴翼を敷く連合軍。

数で勝る明智軍、数は少ない者の甲州兵に次ぐ強兵三河衆を要する徳川軍。

数だけなら並の大名よりある織田家の要する尾張衆。

注意すべきは織田軍最強の鉄砲衆、佐々木成政がこの戦場に現れることだ。

あの部隊の鉄砲衆は明智の鉄砲衆に劣らぬ精鋭で、彼が発明した二段撃ちは驚異的な威力を持つ。

しかし彼の抑えには越前の柴田、越後の上杉に応援を要請しているため援軍に現れるどころか自領すら危険になっているだろう。

さらに甲州や信濃近隣の豪族にも真田に領地切り取り自由を理由に押さえつけて貰っている。

更に真田の援軍に近江衆を派遣し信濃方面の抑えは完璧だ。

つまり自領に攻め込んでくる敵は悉く押さえられていることになる。

『つまりはこれでこの戦は此処が焦点となり、此処での勝敗が全体の勝敗に繋がるな。』

「三家の働きに報いるためにも此処での勝利は絶対材料か。」

『いや、負けなければ良いだけだ。』

「負けなければ？」

孫一はその言葉が気になり聞き返す。

其処に氏郷が現れる。

「つまりは此処が長引けば徳川は自領の守備をしなければならぬと言つことになる。」

『そうだ、その為徳川軍は短期決戦を挑まねばならない。』
なるほどと孫一が言つ。

長期戦になれば此方が有利になるのか。

「ならじっくり腰を落として待ちかまえるのか。」

忠興がそう言つて武器を脱ごうとする。

『いや、だからこそ。奇襲を行う。』

その言葉に三人とも驚愕する。

敵の狙いは解つているのにわざとそれに乗る。

普通はと言つよりあり得ない。

「そうか、敵は奇襲がないと思つているから。」

『いや、敵も奇襲を呼んでいるだろう。だからこそ岩崎の兵もかなり少なくなつて居るんだ。』

恐らく空城の計でも仕掛けて居るんだろう、と言いながら岩崎への道筋を眺めている。

岩崎城を守る兵は約二千。

その兵力なら先行隊だけでも落とせるだろう。

「敵の策を利用し、逆手に取るか。」

面白いと良いながら氏郷が部隊に声をかけるために陣から出ていく。

『先行隊と合わせてすぐに動くぞ。』

「ははっ」

光慶率いる奇襲部隊が動いたのは日が昇る前であった。

早朝、明智軍の中央の兵と小牧城から出てきた兵が正面から睨み合つていた。

明智軍大将斎藤利三は強力な三河武士と当たるにおいて部隊間の連

携を重視し、正面からではなくいくつもの方面から攻め掛かろうとして

いる。

対する徳川軍大将である井伊直政もまた名将であるため正面からぶつかり合うという愚策は使わない。

それに家康がなるべく中央は攻め込まず敵の攻勢に耐えるべきと言っているため、果敢に攻め掛かることはしない。

恐らく何らかの策を弄しているであろう。

「忠勝よ、この戦まさにこの後の天下を決める戦になるだろうな。」

「そうだな、殿の天下のためにも負けるわけにはいくまい。」

そう言っていると忠勝は蜻蛉切りを持って馬に乗る。

決戦の時は近く、両陣営の緊張は高まる一方であった。

そして騒がしかった陣営が一気に静まりかえる、全兵が察したのだ。始まるのだと。

先に仕掛けたのは明智側であった。

「柴田、阿閉隊は本多隊に当たれ。

溝尾、伊勢隊は鳥居、大久保隊に向かえ。

御牧、松田は高木、松平に向けて進軍。

山崎、安田は他の部隊の援護を行え。」

利三の号令で明智の軍勢が徳川目掛けて進軍していく。

それを見た徳川軍大将である井伊直政もすぐさま軍を繰り出す。

「平岩は我らと共に中央の敵に当たる。

鳥居隊と大久保隊は敵の左翼に当たれ。

敵右翼は高木隊、松平隊が迎撃せよ。

忠勝殿には敵の遊撃隊の対処をお願いします。」

「任せよ直政殿、この忠勝が敵の進撃を食い止めますようぞ。」

忠勝はそう言って蜻蛉切りを持ち前線に向かう。

それを見届けてから直政も出撃する。

「我らも遅れるな、此処を死守せねば我らは総崩れぞ。」

自らも槍を持ち出陣する。
まさに全兵力を持つての総力戦。
足軽が奔めき、騎馬が駆けめぐる。

しかし所変わって左翼の織田勢は静かなものであった。

「敵もかなりの兵力、しかし徳川の部隊は四千のみか。
ならば後は烏合の衆よ。」

藤孝はそう言つて自軍の布陣を見る。

「敵は中央の徳川に戦力を集中させ、更に岩崎を手薄にすることで
敵を誘い込み殲滅。」

左翼の織田は敵の足止めが役割。

ならば此処は足止めをさせて貰おうかね。」

そう言つと藤孝は軍配を持つて将に命令を下す。

「儂等は敵の足止めが目的じゃ、そうすれば後は大殿と若殿の策が
的中すれば敵は崩れるであろう。

攻めるのはそれからじゃ、それ故に肥田兄弟は前線に出て後退する
敵を追撃せよ。」

溝尾、妻木は片方から敵に進軍するのじゃ。

猪飼は各部隊の連携を効率よくするため動け。後は儂が終わらせよ
うぞ。」

そう言つと藤孝は陣に下がっていった。

「なんと、戦鬪を放棄するとは何事だ。」

「全くだ、明智魂を見せてやるものを。」

溝尾茂朝と肥田家澄は憤慨して文句を言う。

これだけの戦力を持って余すなど以ての外であると言っている。
しかしそれを諫める者もいる。

「そう言つな、藤孝殿の知略にはそれがした地など足元にも及ばぬ。」

「そつだ、きつと何か勝算や狙いがあるのじゃろつ。」

「うむ、あの御仁は策を使わせれば明智家一の使い手よ。その御方がそう言っておられるのだそうなのであるう。」
妻木広忠、猪飼昇貞、肥田帯刀の三人が言う。
確かに藤孝は明智家の中で最も策略に優れている。
きつと何か策があるに違いないと思っっている。
そう言つて三人は自分の部隊を見に行く。
此方の決戦はまだ後である。

「そろそろ、岩崎城だな。」
「ああそうだな。」

二人の将が岩崎付近の山中で話し合う。

これより先に行けば敵の支配下にある岩崎城が見えてくる。
この二人の目的は岩崎城への奇襲である。

この奇襲が成功すれば敵の意表を突けるはずだ。

自分たちの後ろには明智家の若頭である光慶が来ているはずだ。

自分たちが気を引いている内に落としてくれるだろう。

それならば自分たちには出来ることはただ一つである。

「行くぞテメエ等。俺に付いてこい。」

吉清がそう言つて岩崎城に向かっていく。

「全く、血気の早いことだ。」

易家もそう言つて続く。

山中を降ると岩崎城を守る守備兵達に見つかる。

「敵襲。」

そう言つた兵を切り倒し進む。

「おらおら、この木村吉清様のお通りだ。」

木村吉清はそう言つて突き進んでいく。

しかし敵の鉄砲隊が出てくる。

すると竹束を担いでそれを防ぐ。

幾つか貫通してくるがこれではらく持ちこたえてくれるだろう。後は奇襲成功まで持ちこたえれば良いだけだ。二人はそう言いながら敵の攻勢を防ぐ。その為敵の兵は彼らに引きつけられていく。

大きく迂回して岩崎城の付近に来た光慶達は部隊を四つに分けて岩崎城を囲んでいた。

今は正面門で木村隊と並家隊が戦っているため守備兵の殆どがそちらに向けられている。

今なら城にはいることも容易であろう。

『まずは蒲生隊が突撃し、続いて細川隊が突撃する。それを見てから俺の部隊と雑賀衆は突撃する。』

「戦力は此方が上だがただの力攻めでは落とせるか解らんからな。」
「なるほど拡散攻撃で手利きの注意を逸らし、その隙に一気に取るか。」

「それじゃあ、突撃する時間が重要だな。」

『それについては各自の判断に任せるが蒲生隊は一時間後に突撃開始だ。』

そう言っただけで別れた。

その事を思い出しながら様子を見る。

あと少して一時間が経つはずである。

その時はすぐに動けるように部隊を整列させる。

そして、その時がやってきた。

襲撃を意味する鉄砲の音が聞こえる。

それを聞くとすぐに声上がる。

それは恐らく二部隊が突撃した音なのであろう。

そしてすぐに部隊に命令を下す。

手薄になったであろう場所に向けて進軍する。

『岩崎を落とす、行くぞ。』

その頃孫一もその様子を見ていた。

「やっと来たか、いくぜ野郎共。」

そう言うのと全員が敵に突撃する。

四方から責め立てられて岩崎はかなり危険な状況にある。

岩崎城を守備する榊原康正は一つの決断を下す。

「全軍、本陣に帰還するぞ。」

つまり敵は岩崎城を放棄したのである。

その為光慶達は易々と岩崎城を手に入れる。

「これで一安心ですね。」

孫一がそう言つて座り込む。

『いや、これからが決戦だ。』

光慶は敵本陣がある方向を見ながらそう言つ。

「何故ですかい。」

「敵は撤退しましたが。」

木村、並河もそう言つ。

「この時を待つて奇襲を行うつもりでしょうな。」

『恐らくな、奇襲に成功したところを再奇襲する。』

その読みが当たっているかのように康政が送った伝令が岩崎城陥落を家康に伝えていた。

「岩崎陥落と、敵は此方の策にはまつたか。」

家康はそう言つと伝令にまた命令して自分も立ち上がり刀を持つ。

つまり出陣するのである。

光慶が読んだように岩崎城を奇襲するために。

敵が野戦に出ればそのまま討ち、籠城すれば裏道を通り奇襲する。

恐らく敵は野戦を挑んで来るであろう。

其処を此方が全力で戦い討つ。

それが家康の狙いであつた。

「織田殿はまだ戦闘が始まつて居らぬようだな。」

そう言うと更に伝令に命令を下す。

「ただ津具は此方に帰還せよ。そして信雄殿に此方に来るように頼み込むのだ。」

つまり此処に戦力を掻き集めて短期決戦を行うつもりなのだ。

二万の敵を討ち取れば敵戦力は激しく低下する。

そして敵左翼の穴を通じて敵本陣を襲撃すれば敵は総崩れであろう。それ故に入念に命令を重ねているのだ。

「米津、渡辺は儂等について参れ。」

そう言うと家康は軍を束ね、決戦の準備を進めていく。

家康一世一代の大勝負に出ようとしていた。

その頃中央の戦いは両軍互角であった。

兵力で勝る明智軍は果敢に徳川軍に攻め掛かった。しかし……、

「本多平八郎忠勝、此処を通りたくば我を倒して見せよ。」

忠勝が蜻蛉切りを振るい敵を吹き飛ばすかのように切り倒していく。

「我が名は井伊直政、人切り兵部の名に賭けて此処は通さぬ。」

井伊直政の奮闘により敵は前に進めない。

織田信長から日本の張飛とたとえられた本多忠勝と井伊の赤鬼の名を持つ井伊直政の両名の奮闘により明智軍は攻め倦ねることになる。その為徳川軍は嫌に勢い付き数で劣るのを忘れさせるように戦っていく。

もちろん明智軍も手を拱いて見つめているわけではない。

「山崎長徳、まかり通らん。」

長徳が敵兵を討ち取りながら進む。

しかしさすがの三河衆の前に思うように進むことが出来ない。

「さすがは徳川四天王、此処は突破できんか。」

利三は齒がゆく思いながら出来るだけ被害を出さないようにしながら戦を続ける。

もはや中央は長期戦に持ち込まれていた。

しかし両者を突破せぬ限りの本陣への進撃は出来ない。
こうなれば奇襲隊に賭けるのみである。

第十八話 決戦（後書き）

立ちはだかる徳川三傑。

圧倒的武力の前に数々の兵が討ち取られていく。

そして家康本陣の危機に起死回生の秘策とは。

そろそろ動いてくれよ織田軍。

次回、ついに永木にいて続いた小牧の戦い終結。

そして第一章の最後になるのか。

これからの進展

あと数話でこの小説は第一章を終えるわけですが。

つまり第二章が始まると言つことなので読者の皆様にこの後の進展をアンケートしたいと思います。

そのアンケート集計後に第二章を考えていきたいと思ひます。

ただし此方の資料や地域の都合上無理な場合もございませぬのでアンケート結果通りになるとは限りませぬので宜しく願ひします。

これから出される六つの中から選んでください。

- ? 明智家当主ルート
- ? 伊達家仕官ルート
- ? 羽柴家仕官ルート
- ? 島津家仕官ルート
- ? 諸国放浪ルート
- ? その他（要望を書いてお送り下さい）

これらの中から一つ選んで感想を送って下さい。
ちなみに現在友人からは伊達家仕官ルートを進められています。
もし感想が来ない場合は友人の要望通りに伊達家仕官ルートを進め
たいと思います。
結果によっては第一章のエンディングに変化があるかも知れません。

これからの進展（後書き）

感想ドシドシお願いします。

第十九話 終戦 第一章完結（前書き）

ついに今回でラストです。

しかし第二章は続くので宜しくお願いしますよ。

第十九話 終戦 第一章完結

戦が始まってから数時間、既に時間は昼過ぎであり両軍共に疲労の色を見せていた。

しかし数で劣る徳川軍は徳川四天王の活躍によって互角の勝負となっており、どちらが勝とも解らぬ戦になっていた。

しかし徳川本陣の小牧山である秘策を用意している人物が居た。

徳川軍総大将、徳川家康である。

徳川本陣には岩崎城から帰還した榊原の部隊と遊撃隊として布陣していた米津、渡辺隊も合流し清洲城から呼び寄せた織田信雄の五千の部

隊も合わさって合計一万六千の部隊となっていた。

そして家康は此处で短期決戦を行うべく兵力を結集しているのだ。

岩崎城に布陣している奇襲部隊を破れば、明智軍は片翼が崩れることになる。

そうなれば明智家と和平を結ぶにしても有利な条件で降伏できるだろう。

現状この戦は負け戦だ。

ならばどういふ負け方をすべきかを考えなければならぬ。

そうすれば徳川家を無下に扱ふことは出来ないだろう。

今さら織田家のために戦力を消費するわけにも行かないのだ。

「岩崎城に進軍せよ。」

小牧長久手の戦いもついに終焉を迎えようとしていた。

明智軍右翼を担う細川藤孝は清洲城の方を眺めていた。藤孝は家康が岩崎城に向かうことを既に読んでいた。そしてその時を待っていたのである。

岩崎城に進軍した軍勢は光慶等の軍より多いであろう。

「まあ、若なら何とかなるじやろう。それにの。」
藤孝がそう言う後ろでは右翼の兵が出陣の準備を進めている。

現在清洲城に織田信雄が居ない、つまり総大将が居ない状態なのだ。もとより信長死後衰退を始めていた織田軍だ。

精鋭部隊は基本柴田や羽柴、明智などに振り分けられていたため圧倒的不利である。

しかし清洲の愚将、岡良勝はそれすら解らないようだ。

「愚かな、己の欲のために良将を遠ざけるとは。」

日野弘成、前田玄以の兩名は織田でも知られた名将だ。

しかし彼らは三法師（後の秀信）をたてていたため信雄から煙たがられていたのだ。

本来城に残って内政をすべき筈の前田や前線の日野の兵が少なすぎるなどの弊害も出ている。

そう思っていると出陣の準備を終えたことを告げに来た妻木広忠が片膝を付き報告する。

「出陣の準備、完了とのことです。」

その報告を聞いて藤孝は立ち上がり自らの馬に乗り兵達の方に向かう。

広忠もそれに続き自分の部隊に戻る。

ついに戦場全体が動こうとしているのである。

激戦の中央は未だに両軍共に拮抗していた。

いや、わずかながら徳川軍が押している状況である。

戦線はジリジリと押され始め、逃亡兵は出ていないが徐々に下がっ

ているのだ。

しかしそれでも利三は大きな動きを見せない。

明智の兵は徳川に押される形で後退しているのだ。それを見た徳川勢は勢いだつて猛攻を加えていく。

「このまま押しきるのだ。」

忠勝の激励で更に士気を高める徳川軍。

しかし井伊直政は嫌な感じがしていた。

まるで明智軍が何かを狙っているような気がしたのだ。

しかしその意図が読めない。

此方が戦線を押し上げれば家康が岩崎城を攻略するのに救援が追いつかない。

それに此処で破られて本陣が落ちれば本末転倒だ。

井伊直政は何らかの疑惑を持ちながら槍を振るっていた。

徳川の猛攻を見た利三は顔をニヤリとさせる。

「愚かなり直政。我が策に気付かぬとは。」

利三はそう言いながら戦線を下げていく。

利三の狙いはなるべく戦線を下げ、家康本陣から離れさせることだ。

つまり、わざと後退しているのだ。

戦線を下げつつ乱れていた隊列を整わさせ敵の猛攻に耐える。

中央でも明智軍の作戦が始まるうとしていた。

右翼では既に細川軍が準備を終え後は突撃の命を待つだけであった。

「行くぞ。昇貞は此処の守備せよ。家澄は酒井を攻めよ。茂朝は森を帯刀は前田を攻めよ。他の者は清洲を攻めるぞ。」

藤孝の命令に各部隊が反応して突撃を始める。

これまで動かなかった部隊が動いたため不意を突かれた形となった。織田勢は突撃をまともに食らってしまう。

しかし酒井忠次の部隊はすぐに反応し応戦する。

いつか攻めてくると解っていたため警戒をしていたのだ。他に弘成の部隊も応戦する。

しかし他の隊はそうも行かない。

仕方が無いとも言い切れない、前田は元々内政は優れていても武人ではない。

森にしても彼は軍を率いる器ではなく槍を振るい命令される人間である。

その上一癖ある彼らは信長故に扱えたのである。

もはや織田家中の心は信雄から離れているのだ。

「幾ら徳川四天王とも言えようとも、この総攻撃は防げまい。」

「くっ、抜かったわ。」

家澄の言葉に忠次も齒痒い思いをする。

この大軍勢で攻められれば幾ら忠次といえようとも織田の支援には回れない。

更に自身の部隊も襲われているため織田所ではないのだ。

無論それは織田勢も同じであった。

「武人としての前田など恐るるに足らず。」

帯刀はそう言っつて槍を振るう。

元より部隊の指揮が違う、更に不意打ちでまともに反応できていない状況だ。

これではもはや負け戦である。

同じく森隊も戦列は乱れ、逃亡兵も出ている始末だ。

それ見て長成も逃げ腰になっていた。

ただ唯一応戦している弘成も苦戦を強いられる。

もはや兵の士気が違う。

此方は無事でも他の部隊は半ば壊滅状態だ。

これでは耐えようがない。既に負け戦は決まった。

しかし信長様が残した織田家、此処で潰えるわけにはいかん。

そう思うと自ら槍を振るい立ち向かった。

清洲の良勝は焦っていた。

既に各門から攻撃され既に脱出も出来ない状況だ。

「くそつ、何故俺がこんな目に遭わなければならんのだ。」

そう言いながらこの状況を凌ぎきる策を考える。

しかしこの状況下でそんな策など無意味だ。

もはや清洲城の落城は目前であつた。

岩崎城に進軍した家康本隊は岩崎城外で待ち受けていた光慶軍と向かい合つていた。

この選択は正しいと言えるだろう、岩崎城は家康の城であつたのだ、隠し通路などがあるかも知れない。

それを考えると籠城はすべきではない、そう考えた光慶は出陣したのだ。

光慶勢一万二千、それに対して徳川軍一万八千。兵力だけで考えるならば家康の方が勝っている。

しかしこの兵力差は光慶は何度でも耐えてきた。

しかし敵は野戦の天才である徳川家康である。

「どうする光慶。」

家康はそう言つて布陣完全に終える。

家康は右翼に織田勢六千、左翼に渡辺、榊原隊六千を置いている。

中央には精鋭の旗本衆と六千の兵が居る。

対して光慶は先陣に忠興隊三千、敵右翼には孫一隊三千、敵左翼には蒲生隊三千、そして敵本陣に向かうのが光慶隊三千である。

完全に不利な状況であるにもかかわらず突撃を始めようとする光慶達。

それを見た家康は凄まじい悪寒を感じた。

何か危険、しかしこの状況で何が危険と言えるのだろうか。

所詮敵は一万二千、それを潰せば後はもうお終いだ。

そう、これさえ倒せれば。

しかしそんなことなど光慶も解っている。

これまでお膳立てしてきた奇襲作戦を成功させるべく兵を進める。

『私たちがこの戦に勝たねばならん、もし我らが負ければ徳川は後の天下を狙うだろう。』

光慶が演説口調で言う。

それに兵達はしっかりと聞き入りまさに訓練された兵士であった。

『数で劣る私たちは死を覚悟せねばなりません。ゆえに、死中に活を求めなさい。』

一人が十人を倒す覚悟を持ちなさい。敵本陣の守りを崩すのです。突撃。』

光慶がそう言うとも明智軍がなだれ打つように出てきた。

徳川はそれに応戦するように鉄砲を撃ってくる。

しかしそれでも止まらない、実際鉄砲だけで敵を殲滅することは不可能に近い。

この時代の鉄砲は一般兵の命中率は三割を切っていたという。

そうなれば外れる弾の方が多くなることは必然である。

それに対して明智軍は走りながら鉄砲を撃ち込む。

もはや当たる可能性はかなり低いが忘れては行けない明智の鉄砲隊は天下一である。

更に傭兵部隊である雑賀衆の鉄砲隊もいる。

鉄砲を使えば此方の方が勝るに決まっている。

何組もの鉄砲隊で敵の前線を崩して突撃する。

「うおおおおお！！」

忠興は叫び声のような雄叫び声を出して突撃する。

そして一気に敵兵を斬り殺す。

刀を振るいそれが血で切れなくなれば敵の兵の刀を奪って切り裂いていく。

「敵の前線を崩すのだ。」

氏郷は槍を振るって敵を薙ぎ倒していく。

並の兵ではかれに太刀打ちできず蹴散らされていく。

それに続いて彼の部隊も斬りかかっていく。
既に覚悟している兵である一歩も退かず戦う。

「おらっ!!!」

そう言つて孫一は敵兵を蹴り飛ばす。

そして持つていた鉄砲で兵を撃ち殺す。

そして斬りかかってきた兵の刀を銃で受け、そのまま殴り殺す。

他の兵もそれぞれ突つ込んでいく。

『明智十五郎光慶、参る。』

そう言つて太刀で兵を斬り殺す。

返り血など気にしない、己を血で濡らしても戦い抜く。

その覚悟を持つて敵と戦う。

その為明智軍は数で劣る徳川軍に対して互角に戦鬪を続けていた。

しかしやはり多勢に無勢である、だんだん押し返されてくる。

「くっ、これまでか。」

氏郷は討ち死にを覚悟して敵を倒す。

「玉子の笑顔を見るまでは死ぬことは出来ん。」

忠興は妻のことを思い浮かべて敵に挑む。

「雑賀衆の恨み、此処ではらしてやる。」

かつての恨みをはらさんと戦う孫一。

しかし戦況は完全に徳川に傾いていた。

『進退、誤ったか。』

光慶すらも討ち死にを覚悟した。

だが其処に、

「木村吉清、光慶様の窮地を救うべく援軍に参った。」

「同じく並河易家、援軍に参上した。」

この二人は岩崎城で光慶の苦戦を聞くとすぐさま兵を集め光慶の窮地を救うべく出陣したのだ。

各隊二千ずつ率い両翼に進軍する。

その為閉じるまで一歩手前だった両翼の軍は後方から襲われる形となりまた混戦になった。

そしてその混乱を光慶は見逃さなかった。

『全軍反転、敵本陣を狙い討て。』

その瞬間全部隊が一斉に徳川本陣に斬りかかった。

最後の決戦と言わんばかりの威圧にだんだんと戦列が乱れてくる。

しかし最後の一隊が抜けない。

服部正成つまりは服部半蔵である。

彼らの旗本衆は家康のために命を散らして守っているのだ。

その為家康も敵の攻撃を見て考えていた。

これも所詮は局地的な反撃だ。すぐに鎮圧される。

しかし此処で思いがけないことが怒った。

いきなり後方から迫り来る部隊があるのだ。

「後ろから、何処の部隊か。」

家康は声を荒げて言う。

やっと敵を倒す寸前までに来たのに此処で負けては全てが水泡に帰してしまう。

「敵兵です、家康様すぐにお逃げ下さい。」

兵士から言われて別の陣に逃走しようとしたところ、敵が見えてきた。

桔梗の紋、戦闘に立つはかつて自分を卿で接待してくれたかの明智光秀である。

「なんと、回り込んできたというのか。」

光秀は始めから戦場で姿を見せていなかった。

本陣にこもっていると思っていたため家康も用心していなかった。

そして気が付いた、これこそが敵の狙いであったと。

岩崎城が落ちることで家康がその城を奪い返しに来ると読み光慶を配置する。

そして中央は少しずつ後退し光秀の奇襲を悟られぬようにし、本陣から離れさせる。

織田軍は信雄が家康本隊と合流したため極端に兵力が減り、細川の餌食となった。

それも細川がこれまで全く攻めなかったため不意を突かれる形となつて。

そしてこの岩崎城奪還戦にて光慶の突撃による混戦、そして更に時間を置いてからの岩崎城からの援軍。

これで更に混戦を誘う。そうなれば自然と家康の守りは薄くなる。

「全てはこの為の布石か。」

家康は苦虫を潰したような表情になる。

しかし光秀は待つてくれない。

「明智十兵衛光秀、いざ参る。」

そう言つと家康に斬りかかる。

その反動で家康は馬から落ちる。

しかしすぐさま立ち上がり刀を抜く。

光秀も馬から下りて斬りかかる。

ガキーン！！

両者の刀がぶつかり合う。

「己、逆臣光秀め。信長様の仇取らせて貰う。」

そう言つて離れる。

周りではそれぞれの旗本衆が斬り合っている。

「信長様の仇か、確かに私のしたことは許される者ではないでしょ

う。」

刀を家康に向けて構える。

「しかし、その業すら背負っていかなければならないのです。私が

願う明日を見るために。」

「貴殿が願う明日など。」

家康は斬りかかるも光秀に止められる。

そして光秀の蹴りに吹き飛ばされる。

「私が願うのは、戦無き明日。……………それがあの御方の望みでもあ

るのだから。」

後半は呟くように言う。

思ひ出すのは本能寺で斬り合った信長との会話。

「うぬの願い、思いの強さというのをこの信長に見せてみよ。」
剣を此方に向けて言い放つ信長に光秀は刀を構える。

圧倒的は威圧感。

さすがは魔王と呼ばれることだけはある。

「私はあなたを倒して望む明日を作る。」

「うぬの願い？ならそれを見せてみよ。」

「いざ、参る。」

光秀は刀を構えて走る。

そして信長に向けて斬りつける、しかし全て弾かれる。

強い、それが光秀が感じた思いであった。

かつてうつけと呼ばれていた頃から遊びながら培った剣術。

それは光秀を上回る程であった。

ガキーン！！

ギーン！！

ガン！！

両者は一歩も退かぬ斬り合いを見せる。

それに対して光秀の部下は遠巻きにそれを見ていただけであった。

二人の勝負を邪魔させないようにしているのだ。

「どうした光秀、うぬの願いはその程度か。」

信長が振り切った剣に吹き飛ばされる光秀。

何とか受け身を取り再度構える。

「私はあなた様の作る天下を見たかった。しかし、わたしは、私を

信じ付いてくれる者達のためにあなたを倒す。」

「ならば来い光秀、うぬの願いが勝か。それとも信長の願いが勝か。」

「

光秀はそれを聞くと居合いの構えを取る。

信長は肩の位置まで手を挙げて構える。

そして両者とも止まる。

そして次の瞬間燃えていた本能寺の木々がバチツと破裂する音がし

た。

その瞬間両者が走り光秀は刀を振り抜き、信長は剣を振り下ろす。そして……。

「ぐあ。」

そう言つて体から血を流して倒れたのは信長であつた。

光秀は信長の元に近寄る。

其処には穏やかに笑つている信長が居た。

「うぬの作る天下、信長も見てみたいぞ。故に天から光秀の天下、見させて貰うぞ。」

「信長様。私は。」

そう言つと信長は光秀に微笑みかけ、そして息を引き取つた。

「見ていてください信長様、私は戦無き地平を築く。」

そして家康に斬りかかる。

それをなんとはい避け応戦する。

「あなたに私と信長様の業を背負う覚悟があるか、この刀で見極めさせていただきます。」

そう言つと刀を収め居合いの構えを取る。

そして……

「はあっ!!」

光秀が家康に向かつて斬りかかる。

しかし家康に当たる前に一つの影が二人の間にはいる。

「主は討たせはせん。」

「半蔵。」

旗本頭の半蔵である。

彼は寸前で二人に気付き間に入り込んだのだ。

ギリギリのタイミングで入つたため半蔵の腕が少し切れている。

「此処はお引き下さい主。」

半蔵がそう言つと家康は逃走を始める。

それを見て光秀も半蔵から離れて、

「さすがは伊賀の忍よ。」
そう言つて部隊を引き連れて撤退していく。
そして光慶も岩崎城に帰還し、清洲城も陥落。
中央も撤退時に手酷い被害を受け敗走。
この戦、完全に明智軍の勝利であつた。

そして光慶が部隊を引き連れて本陣に帰還していた。

「やりましたな光慶様。」

「さすが義弟よ。」

「俺の鉄砲も使い概があるものよ。」

三人はそう言つて光慶を褒め称える。

今回の光慶が立てた作戦で何とか勝利を収めた明智軍。

これではばらく静かな日々を暮らせるだろう。

『これも皆のおかげだ。礼を言う。』

そう言つと三人は照れくさそうに頭をかく。

しかし、これが四人で話す事がしばらく無くなると言つことは誰も
知るよしはなかつた。

そしてその瞬間が訪れた。

「光慶覚悟。」

そう言つ声かしてそちらの方を向いた瞬間。

バン！！

銃弾が光慶に向かう。

そして……………

バアン！！

銃弾は光慶の肩に当たる。

しかしそれだけでは終わらない。

とどめの一発と言わんばかりにもう一発撃つとそれは馬に当たった。

そしてその泥言った馬が跳ね上がるように暴れる。

そして光慶は弾き飛ばされ、崖下の川に向かって。

「光慶！！」

孫一がそう言つて手を伸ばす。

しかし後数ミリの所で届かず落ちてゆく。

「光慶ーーーー！！」

孫一の叫び声だけがその場に木霊した。

第十九話 終戦 第一章完結（後書き）

何とか最後まで来ました。

お陰で中間がピンチでしたけど（涙

衝撃のラストでしたが開くまで第一章の終わりです。

まだまだこれから続くのでお願いします。

近々予告編も出しますので。

それでは。

第二章始動（前書き）

やっと始まるかも知れません。

第二章 始動

1584年、明智軍と織田、徳川連合軍が小牧長久手で戦をしてから数ヶ月。

一度静まったかに見えた日本はまた大きな戦乱が巻き起こることとなる。

事の始まりは西日本九州である。

「なに、島津が同盟を破棄したと。」

島津家の同盟破棄により動き出した九州。

「北九州の大友家が救援をこう文書が届いております。」
ついに日本、天下統一への戦いが幕を切る。

「羽柴家、毛利との交戦を始めました。」

ついに動き出した羽柴軍。

秀吉も天下取りに乗り出し始める。

本州に向けて進行を始める島津。

四国遠征での大敗で衰退した毛利を攻める羽柴。

西日本はまさに激戦区となりつつあった。

そして遠く離れた関東の地。

着実に領地を広め確固たる権力を持つ北条家。

「真田幸村これにあり。」

上田城での激戦。

「奥州、制圧じゃあ。」

伊達政宗による奥州の制圧。

上杉との同盟、北条との決戦。

東日本でも動き出す戦乱の気配。

友との絆。

天下への思い。

平和への信念。

信じる物のための戦い。

そして……、

「明智家二代目当主、明智十五郎光慶でございます。」

第二章始動（後書き）

最後は恐らく東西に別れてもあの場所での決戦です。

第二十話 決戦の後

1584年

秀吉率いる羽柴家の所属する播磨、北陸に籠もり明智家に交戦する
佐々成政、越前で明智家と同盟を結んでいる柴田勝家、自らを織田
の正

当後継者として明智家と交戦する織田信雄の居る尾張。

それらを残して旧織田領を制圧した明智家。

そして天正十二年

小牧長久手の決戦にて家康の包囲作戦を他家との連携で防ぐ事に成
功。

さらに織田、徳川連合軍を小牧で破り畿内を完全に制圧することに
成功した明智光秀。

しかし勝利に喜ぶ光秀を悲劇が襲った。

嫡男である光慶の行方不明だ。

小牧長久手の戦いで折に織田家家臣、森蘭丸の兄である森長成の
奇襲に遭い崖から落ちて転落。

それから行方を眩ませていた。

「まだ光慶は見付からんのか。」

光秀は落胆したように呟いた。

無理もないであろう、優秀であり自らの跡取りとして最高の人物で
あったのだ。

「殿、心配せずともすぐに見付かりますよ。」

藤孝が意気消沈した光秀を慰めようと声をかける。

しかし藤孝の言葉など頼りにならない。

そして藤孝自身もそう言いながら内心ではかなり参っていた。

自らの優秀な教え子であり実の息子のような存在であった光慶の行方が知れないのだ。
周りの諸将も同じだ。

古参の将は昔から子供のように可愛がっていたし、新参の将はいつでも頼れる知将として信頼していたのだ。

だが光慶一人のために国政を止めるわけにもいかない。

それが光秀達を更に悲しませたのである。

しかしさすがは名将として知られた光秀である。

すぐさま光慶失踪後起ころうとした内乱の兆しを完全に沈めたのである。

しかしまだ予断を許せる状態ではなかった。

信州上田城

真田氏が支配しているこの土地。

元は甲斐の名門武田家の旧領であった。

信玄時代は最高の栄華を極めた武田家であったがこの勝頼が陣代になつてから信玄時代の家臣団との関係が悪化。

元々諏訪家出の側室の息子であった勝頼は武田家の主になることはなかった。

しかし後継者たる信勝はまだ幼く、その為信勝が成人するまでの間勝頼が指揮を執っていたのだ。

しかしその勝頼が長篠の戦いで織田、徳川連合軍に大敗。

その後に見事独立を果たし、信濃を収めてきた。

この上田城は武田家家臣であった真田昌幸が築城した物で敵に備えるの防備が完全に備えてある。

その上田城の中庭でぶつかり合う二人の兄弟が居た。

「兄上、覚悟。」

弟の鋭い突きが兄を襲う。

しかしそれを兄は見事に防ぐ。

そして反撃を行う。

「でやあ。」

「ぐあつ。」

兄の攻撃で弟が吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた弟は何とか立ち上がりながら言葉を言う。

「さすがは兄上、お強いですね。」

この弟こそ、現在の日本で最も人気のある戦国武将である真田源次朗幸村である。

この幸村については本当は真田信繁というのだが幸村の方が有名なのでそちらを使わせていただく。

そしてそうなるとこの兄というのが幸村の兄である真田源三郎信幸である。

後に真田信之となるがこれは幾つかの説があり。

中でも有力なのが真田家代々から受け継がれてきた「幸」の字を捨てることで父親と弟と決別することであるとされている。

ちなみに多くのゲームなどでは脇役に描かれがちな信之（以降これで統一）なのだが実は幸村より武芸に優れていたそうだ。

しかし基本は幸村の陰に隠れている悲しい武将だ。

しかしその能力は目を見張るところがある。

先程の武芸と言い、父親譲りの戦略。

しかし幸村もそれに負けては居ないと思う。

何故史実で幸村が活躍の場面が少なかったか。

それは少年期の殆どを人質で過ごしたため戦場に出ることがなかったからだ。

しかし今は明智家に臣従して同盟関係と言うことになっている。その為幸村が人質として送られていないのだ。

よって幸村が盗賊などの討伐や昌幸自身から戦略を習うため能力は史実以上になっっている。

その様子を少し離れたところで見ている青年が居る。

『さすがですねお二人とも。』

そう言いながら近づく。

二人は青年の存在に気付き一旦鍛錬を終える。

「おお、光慶殿。もう起きてても大丈夫なのですか。」

幸村が尋ねる。

光慶は彼らが見つけたとき酷い怪我をしていて数日間寝たきりだったのである。

そして一週間前に目を覚まして居たのだ。

現在真田家当主である真田昌幸は明智光秀の下を訪れていない。

その為この場にいる中で光慶が明智家当主であることを知る者は居ない。

光慶の名を知っている物はいるがさすがに顔を知っている者は居ない。

それにこんな場所には居ないだろうと思っているため解らない。

『ええ、お陰で傷もだいぶん治りました。』

「それはようございます、しかしまだ完全には言えていないでしょう。」

まだ無理はせずに休んでいてください。」

そう言っつて信幸が光慶の体を心配して声をかける。

実際光慶の足取りはまだ危なく、銃痕も完全には癒えてはいない。

『あまり心配なされなくとも大丈夫です。』

そう言う光慶をまだ心配なのであろうか、二人はなんだか心配気味な顔をしている。

そんな三人を呼ぶ声が聞こえる。

「信幸さまー、幸村さまー、光慶どのー。」

その声に反応して三人が振り返る。

振り返ったその先には真田家家臣である猿飛佐助がいた。

「これから昼食ですよ、今日の昼食は光慶殿が作ってくれたんですよ。」

そう言うと二人は意外な、と言う表情で光慶を見る。

二人に見つめられた光慶は照れたように頭をかく。

実は光慶は意外と料理が上手いのである。

幼い頃やれることはやってみようという考えでいたため女中等から多くの料理を習っていたのである。

元より器用であつたためすぐに上達し、今ではかなりの腕前になっている。

「おお佐助。今すぐいくぞ。」

「光慶殿の料理には興味がありますね。」

そう言つて二人は光慶を連れて大広間に向かつた。

大広間には多くの人物が既に準備を終えていた。

「遅いですぞ幸村様。」

幸村達の到着を待つていた一人が言う。

全く主を敬わない強者である。

それは兎も角として既に全員が来ていたようだ。

まずは旧武田家臣時代から真田家に仕えている矢沢頼綱。

その息子である矢沢頼康、後一人鈴木重則がいるのだが彼は現在昌

幸と共に明智家に言つている。

そして真田家お抱えの忍者集団の頭領である猿飛佐助である。

「皆集まつたようだな、では。」

そう言つて皆食事にあつづく。

そして光慶の作つた料理に手を付け口に運ぶ。

そして一言。

「う、美味しい。」

幸村が不意に言葉をこぼす。

そして他の面々も同じように舌鼓をうつている。

それを見た光慶も満足そうに食事を続ける。

「しかし光慶殿を見つけたときは驚きましたな。」

「全くだな、さん……見回りをしていたらいきなり見つけたのですからね。」

危うく散歩をしていたとこぼしそうになった幸村。

しかしこのことでそれがばれて後で信幸にこつてり怒られることになる。

『私も谷底に落馬しましたからね。命があっただけ良かったものです。』

そう言いながら食事を勧める。

先日の長久手の戦いで忙しかった真田家にも笑顔が戻っていた。

光慶は午後を城下に出ていた。

そして城下の子供達に勉強を教えているのである。

これからの先の世の中では戦うだけでは生きていけないだろう。

そして戦う必要のない世の中を作らねばならないと思いつながら子供達に勉強を教えている。

優しいな風貌な光慶はすぐに城下の子供達に好かれた。

『良いですか、この地は現在強国に挟まれています。』

そして持参した地図を持って上田城がどの様な位置にいるか示す。それを子供達は面白そうに見つめる。

『まずはこの信濃の北にある上杉家。この家はかつては有名な武田家とも互角の勝負をしたんだよ。』

有名な川中島の合戦の話を入れながら説明する。

無論完全に理解できているかは不明だが何とか憶えているようだ。

『そして南に存在するのが徳川家です。しかし徳川家は明智家との戦で敗北したため今は力が弱まっています。』

やはり小牧長久手の敗戦が響いているのだろう、戦闘の雰囲気はあまり出ていない。

『そしてその徳川家を破ったのが西にある明智家です。この家は現在日本で最も力を持つ家でしょう。』

実際京都を制していることもあつて単体なら敵う相手はいないと思われるのはホントのことだ。

『そして最後に南東に存在する北条家。北条家は関東一帯を統治する強大国家です。』

現在北条家は何やら不穏な分に気を出している。恐らくこの城に目掛けて攻め寄せてくるだろう。

そうなればどうなるか、当主である昌幸不在時に守りきれぬだろうか。

「じゃあ、その大名家が攻めてきたらどうするの。」
子供がその質問をする。

それは誰でも思うことであろう。
実際に後ろの方で聞いている大人達も真剣に聞いている。

『そうですね。現在真田家は明智家と同盟関係にあります。どこから攻められれば恐らく救援に駆けつけてくるでしょう。』

しかしその救援だけで北条軍を撃退できるかは不明である。しかし無いよりはマシであると考えている。

だがその時、この場にいる者達の不安をあざ笑うかのような情報が入ってくる。

「てえへんだ、てえへんだ。」
そう言つて一人の男性が町中を駆け回りながら叫ぶ。

何が起きたんだと光慶達も外に出る。
「北条の大軍が攻めてくるぞ。敵の数は二万だよ。」

そう言つた男はまたてえへんだと叫びながら走っていく。そしてその言葉の意味に気付いた大人達が騒ぎ出す。

「戦だつて？」
「嘘だろ。北条の大軍だつて。」

「昌幸様もいないのにどうやるんだよ。」
そう言つて口々に不安を言っていく。

無論そうなれば子供達も不安になつてくる。
「光慶兄ちゃん、大丈夫だよ。」

「明智の人達が助けに来てくれるんだよね。」
そう言つて笑いかけてくる。

そして光慶は子供達に向けて安心させるように声をかける。

「大丈夫だよ、きつと来てくれるから。」
そう言つて笑いかける。

その後大人達に向けて真面目な顔をする。

「すぐに避難を用意を恐らくこの辺りも戦場になりましょう。それと少し男手を集めてください。やっていただきたいことがあるんです。」

「解つた、若い男手を集めるよ。」

そう言つと大人達は走っていく。

それを見届けた後。

光慶はある場所に向けて走り出した。

「もう、失うわけにはいかないから。」

思い出すのはかつて起きた戦での被害。

安土城での戦いでは自らの策のため多くの民が被害を被つた。

もうあんな思いはさせたくないから。

第二十話 決戦の後（後書き）

始まりました第二章。

いきなり意味不明ですが頑張ります。

第二十一話 共闘？真田兄弟（前書き）

しばらくの間更新できなくてすみませんでした。
これからは何とか頑張りたいです。

第二十一話 共闘？真田兄弟

小牧長久手の戦いから一ヶ月。

これまで一大強国であった徳川家が衰退。

その為北条は西進を決意。

その最初に攻め込む地として選ばれたのが真田家がいる信濃であった。

北条は二万の大軍を動員させ箕輪城を経由して信濃へと侵攻を開始した。

北条軍は北条氏邦を総大将として進軍。

着々と真田本城である上田城へと迫っていた。

対する真田軍は動員数二千、そして真田家当主である真田昌幸が不在であった。

表裏比興と恐れられた名将昌幸を抜きで戦うという劣勢状態になっていた。

その為真田側の士気は低下していた。

「真田の兵は二千足らず。これでは落ちたも同然。」
氏邦がそう言う。

実際数の差は十倍、これでは明智の援軍がつく前に戦が終わるだろう。

そして北条軍はこの信濃侵攻に多くの武將を集めていた。

まずは北条遠征軍総大将、北条氏邦。

そして北条屈指の名将大道寺政繁は自らの河越衆を率いて参陣している。

さらに北条氏康の時代からの古参の将、松田康長。

他にも埴和 康忠、笠原政晴、太田氏房が参陣しており、

各将が手勢を率いて進軍していた。状況は完全に北条方の有利で進

められていた。

「さらに名将真田昌幸も不在とのこと。これでは赤子の手を捻るよ
うな物よ。」

そう言つて氏房が言つて笑う。

既に勝利を確信しており、かなり余裕を見せている。

しかしながら大道寺政繁は違つていた。

かの名将真田昌幸は居らずとも天然の山城である上田の城と息子の
二人は健在である。

恐らく何かを仕掛けてくるだろう。

そんなことを思いながら政繁は待つていた。

しかしそんな心配をよそに北条軍は戦勝を願うと称して酒を飲んで
いる。

まだ自領内であるから大丈夫であるが行く先不安な北条軍である。

上田城には真田の諸将が終結していた。

無論真田兄弟の姿もある。

二人も戦用の姿になっており、顔も引き締まっている。

この戦、真田家の存亡をかけた戦になることは違いない。

その為全員が集まり話し合いをかわしている。

しかし状況は思わしくない。

皆不安なのだ、謀略の将として知られている昌幸がいない状況で戦
うことに。

真田兄弟が優秀とは言えさすがにこのような戦力差は考えていなかっ
た。

「どうすべきか。」

信幸がそう言つて考える。

そこに家臣の一人である矢沢頼康が提案する。

「此処は定石通り籠城戦を行つては。そして明智の援軍を待つので
す。」

その案には賛成の反応はあまりなかった。

この兵力差では援軍到着まで持ちこたえられるかという心配があるのだ。

「しかしこの兵力差では籠城したとしても持ちこたえられるかどうか。」

他の家臣が心配そうに言う。

しかしそれなら野戦を行うか、それはまさに無理な戦法である。

こんな時、昌幸様がいてくれれば。

皆の心にはそんな気持ちがあつていた。

「諦めてはいかん。もし負けるとしても、さすがは真田と言われる負け方をせねば。」

そう言ったのは幸村であつた。

無傷の勝利は勝利にあらず、元来真田家の家訓であつた言葉である。長篠では真田信綱、昌輝兄弟も天晴れな討ち死にをしたという。

それに恥じぬよう全力でぶつからねばならないとされているのである。

「だが幸村、具体的な策はあるのか？」

そう言われると幸村は詰まってしまう。

死ぬ気で戦えば何とかなるほど戦は甘くない。

悲しいことにこれだけの戦力では焼け石に水であつた。

だが其処に一人の男が現れる。

『策ならございますよ。』

そう言つて襖を開けて光慶が入ってくる。

それに全員が驚いて振り返る。

其処には不敵な笑みを浮かべた光慶が立っていた。

北条軍は既に信濃に入り真田本城に進軍を開始していた。

何故この時期に北条軍の侵攻が始まったのであろうか。

それには今ではならない理由が存在しているのであつた。

現在の北条家の勢力は関東全体を制圧し、明智家に対抗する巨大国

家を築いていた。

しかし西の徳川とは同盟関係を結んでおり、お互いに不可侵の条約を結んでいた。

しかしこの戦乱の世にそんな条約など当てになるはずもない。

お互いに牽制し合うことで均衡を保ってきた。

しかし小牧長久手で連合軍が敗走したことで事態は一変した。

織田は完全に明智に潰されてしまい、そして徳川も弱体してしまっただ。

しかし弱体と言っても壊滅的な打撃を受けたわけでもなく、東の抑えだけならまだ十分出来る兵力はあった。

そして現在国内を立て直している最中であり他に手が回らない状況である。

その為北条軍は徳川を無視する形で北上し箕輪城から真田の籠もる上田城に進軍したのだ。

上田城に進軍した理由は他にもある。

まずは真田の兵力が圧倒的に少ないこと。

元々豪族であった真田家は武田家独立後も大した兵力を得ることが出来なかった。

しかしそれでも昌幸の手腕で着実に家を大きくしてきたのである。

そして二つ目の理由が上田の城である。

上田城は山城で更に近くにはかの有名な砥石城も存在している。

砥石城は「砥石崩れ」で有名な城で何倍もの武田軍を相手に勝利した城である。

更に上田城も築城の名手である真田昌幸が築いた防衛のための城である。

その為天然の要塞となっているのだ。

それらの理由が相まって、上田へと進軍したのだ。

しかし、北条軍は二万の内一万二千を箕輪城に残している。

理由は越後の上杉に不穏な動き有りとの報告を聞いて防衛部隊として残したのである。

しかしまだ兵力は八千もあり差は四倍となっていた。

真田軍はまず隊を五つに分けて待ちかまえた。

第一隊は上田城正面で徳川軍を待ちかまえるのは真田切手の戦名人、矢沢頼綱である。

頼綱は五百の手勢を率いて神川付近で徳川軍を引きつける役目にある。

そして長男の信幸は同じく四百の手勢を率いて砥石城に入り北条軍を待ち受ける。

さらに支城である矢沢城には頼綱の嫡男である頼康が四百の兵と共に敵を待ち受ける。

後は幸村が約二百の手勢を率いて上田へと続く道の林の中に隠れて工作部隊を率いている。

そしてこの辺りの豪族の連合軍が籠もる丸子城も北条軍の襲来を今か今かと待ち受けてた。

そして残りの手勢を率いて光慶が上田城に籠もっている。

これでも総勢二千がやっとである。

そしてついに北条軍が上田に侵入してきたのである。

それを確認した光慶は狼煙を上げて各城に知らせる。

すると各支城も同じように狼煙を上げていく。

その狼煙は北条軍からもしっかりと確認できていた。

「全軍、止まれ。」

そしてそれを見た松田康長は全軍に停止をかける。

大道寺政繁は現在上杉の抑えに回っているため陣列には加わっていない。

康長が部隊を停止させたため、垓和康忠、笠原政晴も同じように進軍を止める。

「どういたした康長殿。」

後方から馬に乗ってやって来た康忠が康長に聞く。

「あれを見よ。」

そう言つて指さす先には真田側の狼煙と思われる物が上がっていた。どうやら此方の侵攻が敵に知られているらしい。

「狼煙がどうした、そのくらいの備えもあるだろう。」

当時は狼煙と言えば効率的に敵の侵入や情報の伝達に優れた物であった。

作戦を行うときや、敵の侵入を知らせるときなどもそれに該当する。無論その程度なら康長も大して気にしなかつたであろう。

しかし上田城から発せられた狼煙に呼応するように各城からも一斉に狼煙が上がつたのだ。

「上田城は知将真田昌幸が造つた城。何か備えがあるかもしれん。」

「だがその昌幸は現在不在であるぞ。」

二人がそう言っているとなりの将が後ろからやってくる。

「その通りだ、昌幸さえいなければ真田如き容易く滅ぼせるわ。」

その声に驚いた二人が振り返ると其処には北条氏邦が立っていた。

素早く二人は下馬して跪く。

氏邦は北条一門の中でも随一の武勇を誇りこの遠征軍の総大将に当たる。

既に氏邦の中には上田城攻略の戦術は立っていた。

「康長は二千の手勢を率いて砥石城を攻めよ。」

「ははは。」

康長はすぐに返事をする。

北条家では一門の言うことは絶対でその為北条家は中央に権力が集中する仕組みになっていた。

関東を治める間ならそれで良いだろうが、しかしその先の天下を目指すというのであればそれは。

「政晴も千の手勢を率いて丸子城を攻略せよ。」

「承知。」

「康忠は四千の兵を率いて上田城を攻略せよ。」
「ははっ。」

北条軍は隊を四部隊に分けて進軍を開始した。
氏邦は本陣で各城が落ちるのを待つことにした。
それに合わせて狼煙も形を変えて各城は北条軍を待ち受けるように構えていた。

北条軍は八千の兵で上田城を目指して進軍。

それに対抗して真田軍は上田の各城から兵を出して総力戦で待ちかまえる。

両軍の決戦は間近となっていた。

第二十二話 必勝の策火水の計

沼田城を落とし、上田に迫る北条軍。

それに対して各城に兵を分散し上田城を本陣に置き、総力戦の構えを見せていた。

北条勢は八千の大軍。

迎え撃つ真田勢は二千足らず。

圧倒的な戦力差を前にしても真田の諸城は不気味なほどに静まっていた。

「敵はまるで我らを待ち受けるかのように兵を分散させている。

俺ならば此処は籠城し、上杉のか明智の援軍を待つ。

少なくとも兵力を分散させれば各城が落ちるのは速まり、各個撃破されるだろう。」

政繁は家臣にそう言いながら馬を進めていく。

確かに政繁が言うとおり籠城するのであれば少しでも時間を稼ぐために兵力を集中させておくべきなのだ。

かつて信長に滅ぼされた六角家も同じように兵力を分散させることで織田軍の主力部隊を分散させる戦法にだが信長は迷わず主力を観音寺城に進め電撃作戦でそれを陥落させた。

また近江の浅井も同じようなものであった。

しかも今回は兵力が拮抗して居らず北条の圧倒的有利なのであり、この策は失策であると考えていた。

「だが、あの真田がこの程度の策で終わるはずがない。

恐らく何か仕掛けてくるに違いない。

これは用心せねばなるまい。」

政繁はそう言いながら本陣の守りにつくために部隊を整えていた。

砥石城に向かった松田康長の部隊は既に城兵と交戦を開始していた。

砥石城の守備兵は四百程度の小勢。

守る将は昌幸の息子である信幸。

攻める兵は二千と約五倍の兵力差であったが康長は攻め倦んでいた。「何故だ、何故この程度の小城が落とせんのだ。」
「ただか四百程度の兵が籠もる小城を中々落とせないことに苛立っていた。」

しかし、砥石城と聞いてピンと来る人も多いだろう。

この城はかつて信濃の小大名であった諏訪家の城の一つで武田信玄公（当時晴信）を持ってしても落とすことの出来なかつた城である。砥石崩れという言葉の語源でもあるためこの城は籠城する上では力攻めを行う相手には堅城と言える程の防備がある。

更に対北条軍のために武器などを大量に集めており、五倍の数で攻める康長を相手しても落ちないであつた。

「北条の諸軍め、面白いように撃退されていきおる。」

信幸は城壁に取り付こうとしている北条軍を見ながらそう言った。数で劣る真田軍が前線をしている所為で敵の士気は下がり気味で、それに対して真田の士気は上昇していた。

どんなに大軍を持ってしても、どんなに優れた将が率いても戦う兵の士気が低ければその軍は意味をなさない。

北条軍は砥石城に攻め掛かり無駄に兵力を散らす形になっていた。

笠原政晴の率いる部隊も丸子城を攻め立てていた。

丸子城に籠もる兵は殆どがこの地域の豪族であり地形に明るく、いたる場所から奇襲を行い敵を翻弄しつつ城で敵を迎撃っていた。各所から奇襲するゲリラ戦法で敵軍との兵力差をカバーしていた。ゲリラ戦法はかのアメリカ軍でさえ全滅に追いやられた戦法だ。それほどまでに恐ろしい戦法を当時の兵達が行っているのである。簡単に言えば奇襲の応用なのだがそれがまた面倒であつた。

地形的にも山中に築かれた上田の諸城は防衛に適しており守りの城

である。

北条軍は何時現れるか解らぬ奇襲部隊を相手に苦戦していた。

「くそつ、卑怯なり真田め。堂々と勝負せい。」

政晴は圧倒的数を率いていても城を落とせぬ事に苛ついていた。

そして本陣から戦況の報告を受けている氏邦も同じであった。

何せ元々武士として自らが先頭に立ち戦いたいという気の方が強いのである。

それ故この様な中々戦況が良くない状況では苛ついて仕方がないのだ。

「ええい、不甲斐ない奴らめ。」

氏邦はそう言つて城の方を睨み付けるようにする。

「こうなれば俺が一気に片を付けてくれるわ。」

「お待ち下され氏邦様、氏政様のお言葉をお忘れですか。」

氏邦の性格をよく知っている氏政はこの戦の前に大將らしく本陣を守っておれよと言われている。

本陣が動いて策に掛かれれば前線は崩れる可能性が高い。

それを考慮してのことであった。

しかしいきり立つ氏邦は道繁の言葉など気にもとめずに馬に乗る。

「道繁は本陣の守りについておれ、本陣に五百の兵を置いて他の兵は進軍するぞ。」

そう言つてさつさと進軍していったのである。

「何もおこらねば良いが。」

しかしこの道繁の願いは叶わぬ事になる。

そしてこの時もう一人の男が氏邦の進軍を見ていた。

「敵大将に動き有り、幸村様にお伝えせねば。」

真田忍者隊頭領、猿飛佐助である。

幸村の命令で敵本陣を監視していたのである。

そして動きあればすぐに連絡するように言われているのである。

「氏邦が動いたか。よし、水門を開けよ。」

そう言つて幸村が水門を開けさせる。

その瞬間に貯まりに貯まった水が鉄砲水のように下流に流れていく。

この水の流れならば下流の北条軍はひとたまりもないだろう。

「狼煙を上げよ、反撃だ。」

そして水が流れたのを見た幸村は氏邦を討つべく兵を動かす。

それと時を同じくして狼煙の合図を受けた真田軍は反撃を行つていった。

矢沢城に籠もっていた矢沢頼康が手勢を率いて砥石城を攻める康長の部隊を強襲する。

「敵は正面の城に気を取られている、今が好機。」

そう言つて自らも槍を持ち北条の兵を薙ぎ倒していく。

状況は北条勢が劣勢に立っていた。

長時間砥石城を攻めており疲弊した北条兵と今まで戦線に加わらなかった真田の兵。

更に城兵を撃つて出てきて挟撃されているのだ。

「馬鹿な、これだけの戦力をまだ残していたのか。くそ、抜かったわ。」

そう悪態を付いていると城側の兵達が一層騒がしくなった。

また兵が逃亡したのかと見てみると真田の旗、六銭紋の旗印が此方の迫ってきている。

そして次の瞬間前線の兵が槍で薙ぎ倒され真田信幸の姿が目にはいる。

父譲りの知略と弟以上の武を持つており、既に近隣にその名を轟かせている信幸。

その信幸は康長を睨むと一直線に突き進む。

それを見た康長は身の危険を感じ馬を走らせる。

「退け、退くのだ。」

大將が撤退したのでは話にならない。

砥石城を攻めている兵は総崩れし撤退を始めていた。

上田城では光慶と頼綱が数で劣るながらも奮戦していた。

既に正面門は北条に押しきられている、しかし城に引き込んだ上で
のゲリラ作戦を行っていた。

隠し扉や堀の上からの銃撃。

その為北条軍は思うように進めない。

そして迷路のようになっていの上での奇襲で部隊は散り散りしてお
り統制が思うように取れていない。

敵を見ればそれを追い攻撃する、その繰り返しである。

そして何時しか本城とは離れた場所に誘い込まれていた。

そしてそれを光慶が高いところから見下ろしている。

『敵は此方の策に掛かったな、火計部隊は準備を。』

そう言つて真田の兵に伝える。

頼綱も同じように誘い込んだ北条兵を見下ろしながら攻撃を続ける。

この門を突破されれば策は崩れる。

その為頼綱も総力を結集させて迎え撃っていた。

「関東兵にこの信州兵の恐ろしさを知らしめてやるわ。」

頼綱の攻勢に北条勢は苦戦を強いられている。

そして少し時間が経つと、火の手が上がり始める。

この場所は本城とは少し離れた場所にあり、本城に火の手が回らな
いような構造をしている。

城造りの名人である昌幸ならではの作りであった。

そしてこの火計で兵の大半を失った康忠は後退を強いられた。

そして川を渡っていた氏邦は上流から何やら音が聞こえてくることに気付いた。

「何の音だ。……まさか。」

氏邦はこの音が何の音かに気付いたため兵を急がせる。

「急ぐのだ、急いでこの川を渡りきるのだ。」

そういつて自らも馬をかける。

兵達は何だろうと思っていると川の上流から凄まじい量の水が凄い勢いで流れてきたのだ。

氏邦は何とかきり抜けたが兵の多くが水の勢いに飲まれて流されていった。

「被害状況は。」

「はっ、兵の八割が流されました。」

「八割だと、馬鹿な。」

そういつて驚愕の声を上げる。

だがそんな氏邦に更に悲劇が襲いかかる。

いきなりの銃声、そして北条の兵が倒れていく。

「何事か。」

そう声を張り上げて言う。

そしてそれに応えたのは氏邦が予想にもしない人物であった。

「我は真田源次朗幸村。北条氏邦殿、首級頂戴いたす。」

そういつて槍を突き出す、それを何とか受ける氏邦。

しかし川の水で体を痛めた氏邦には幸村の相手は分が悪かった。

鋭く突き出された槍が氏邦の喉元を貫く。

そして、氏邦はゆっくりと倒れていく。

「敵総大将、北条氏邦。この幸村が討ち取った。」

その瞬間一斉に歓声が起きる。

そしてその知らせを聞いた北条軍は撤退を開始、これ以上の戦闘を望まなかった真田も追撃を行わずに城へと帰った。

丸子城を攻めていた政晴も安ながらの強襲に合い撤退、北条兵は自らの四分の一の兵に敗れ更に総大将も失うという最悪の負け方をし

てしまったのである。

その頃、光慶は一人山の中を歩いていた。
明智領に帰るためである。

そしてその光慶の歩いている方向から数人の武士らしき人物がやってくる。

光慶それに反応せずただ歩いていく。

そして両者が交差する一瞬目を合わせる。

それだけでそのまま歩き続けた。

これが後に明智家と共に末永く交友関係を築いていく真田家当主である真田昌幸であった。

そして帰城した昌幸は幸村達にその合戦の様子を聞いていた。
そして一段落したところで幸村が呟く。

「しかし、光慶殿は何処に行ったのであろうか。」

「光慶？」

「はい父上、我らに加勢してくれた旅人です。」

その瞬間昌幸先程あつた青年を思い出す。

そしてあの未来を見据える瞳をした青年、もしや。

「なるほどな、明智殿は良き息子を持ったとされる。」

「え？父上何かおっしゃいましたか。」

「なにがじゃ、それに光慶殿なら先程儂に挨拶していったぞ。」

「そうでしたか、また怪我でもしたのかと思いましたがよ。」

そしてこのご勝利の宴をすることとなった。

光慶と真田兄弟、この会合は偶然だったのだろうか、それとも……

…。

それを知るのは天のみである。

報告

どうも明智家天下統一への道を書いている刹那です。

ダラダラとこの作品をしていましたがネタに詰まったのでしばらくの間更新が出来ないことをお知らせします。

この冬休みを機に新しい小説の考案に入りたいと思っています。

一応歴史小説のつもりです。

おそらく新しく始める小説を書きながらやりたいと思います。

何時の日かは解りませんが新たに読んでもらえる時が来れば宜しく願います。

しかしこれまでため込んでいたストック分は更新するつもりです。

そして新しく始める歴史小説も宜しく願います。

外伝 本能寺の変 上(前書き)

今回は番外伝として光秀主人公の小説です。

外伝 本能寺の変 上

上田城の戦いから一週間。

光慶は明智家の居城である坂本城に来ていた。

光慶が行方不明になって一ヶ月。

そして光慶が見付かったと言うことで明智家家臣は帰ってきた若殿の様子を一目見ようと集まっていた。

明智家、筒井家、細川家、鈴木家の家臣達。

そして小牧長久手の戦いの後に明智家に属した旧織田家の者達。

それら全ての者達が勢揃いしていた。

集まった者達が色々なことを話していると不意に喋りがやんだ。

家臣の一人が光慶が来たことを告げたからだ。

そして入り口の襖が開き、一人の少年が現れる。

一ヶ月見る前よりも体付きは少しくましくなり、表情も更に凛々しくなっている。

そして堂々とした歩みで光秀の前まで歩いていく。

光秀の前で跪き頭を下げながら行った。

『明智家当主、明智光秀が嫡男。明智光慶、ただいま戻りました。』

対して光秀は光慶以上のキリツとした表情で言う。

「やっと戻りおったか、我が子よ。」

そう言っただけ。

「いやはや、光慶殿が戻られて明智家も安心ですな。」

藤孝がそう言っただけに笑いかける。

そうすると皆「そうですな」「嬉しいことですな」「などと話し始める。

此処に集まっている者達には笑顔が戻っていた。

考えてみると光慶が不在になってから明智家はどうも嫌な空気が漂っていた。

だがそれも光慶が戻ってきたことで払拭できていた。

一部にはこれを好機にと考えていた者も居たが光慶が戻ってきたことでその考えを取りやめにしていた。その後は完全に宴会となり新年を迎えるようなめでたい騒ぎであった。

だが平和なのは明智家とそれに組する同盟国ぐらいと言っていいだろう。

そしてこの一ヶ月で日本全国の情勢は大きく様変わりしたと云っても良いだろう。

まずは九州。

島津家は頭角を現し龍造寺、大友領に侵攻。

その結果島津は九州一の大名となった。

そして中国。

此処は四国遠征に失敗した毛利家が羽柴家に大敗、領地の殆どを羽柴家に奪われることとなった。

これには多くの大名が驚かされることとなった。

しかし光慶等はずいに秀吉が頭角を現し始めたのかと実感した。

近いうちに秀吉は西日本を制圧するだろう。

そうなれば明智家対羽柴家になるだろう。

また東北でも戦乱の火が再発していた。

伊達家を継いだ政宗は自らの軍を率い周辺諸国と対立。

多くの軍から侵攻を受けるもこれを撃退。

優秀な家臣団を率い、奥州平定を目指し侵攻。

母の兄に当たる最上義光と激突を繰り返していた。

越後の上杉も明智と軍事同盟を結び後方の安全を得る事に成功、最上などの東北勢との戦に備えている。

関東の北条は上田での敗戦以来士気が上がらず幾つかの豪族達が明智家に内応するという事態に陥っている。

しかし堅城小田原という要塞を擁する為未だに関東に強大な力で支

配している。

小牧長久手後同盟という形で明智家の協力者となった徳川も関東進出に向けて準備を重ねている。

織田信雄を当主に据える織田家も小牧長久手の敗戦のため家臣達が仇敵である明智家に取り入るといふ深刻な事態なのである。

そう言った周辺諸国の動乱の中、明智家は次に進むべき道を決めかねていた。

西に進むのは簡単に見えてそうはいかない。

羽柴と毛利の両者が戦っている今、下手に手を出せば両者が敵になるかもしれない。

無駄に兵を減らすわけにはいかないためそれは止めておきたい。

西の備えは長宗我部と大阪や大和の阿閉貞征と木村吉清が押さえてくれるだろう。

ならば東進するという考えがある。

しかし現状東の諸侯はというと従属関係にある織田家。

同盟関係のある徳川、真田、上杉だ。

そして敵はというと関東の北条、遠い東北の最上や伊達。

明智の本拠地からはあまりにも遠すぎる。

その間に西の諸侯が攻め込んできたら幾ら両名といえども長くは持たない。

それに遠征になるとすれば兵の兵糧が大量に必要なになる。

決戦でもないのにそれほど多くの兵糧を消費するのは無理だ。

その為明智家は進路を決めかねているのだ。

最も多くの家臣等はこれを良き休暇としてゆっくり家族等と会い過ぎている。

そんな中、徳川家康はある用件があつて光秀に会うべく京まで来ていた。

現在光秀は京の町の治安を守りながら過ごしている。

政務はいくらかはやっているがだいたいは光慶が担っている。とどのつまりは光秀は光慶に家督を明け渡すつもりなのである。元々一人息子であるため光慶が必然的なのだが現在それが強まっているらしい。

そして光秀と家康は二条城で会見することとなる。

しかし周りに家臣等の姿はなく、部屋の外で警備をして居るぐらいだ。

「家康殿、例の件よろしいのですか。」

「なんのなんの、此方からすれば都合が良すぎるといって程ですぞ。」

そう言つて家康は白髪混じった髪をかく。

それを見て光秀も自分の白髪混じった髪をかく。

「しかし、儂等も老いてきましたな。」

「全くですな、信長様と共に諸国を駆けめぐつたあの頃が懐かしく感じますな。」

「ええ、あの頃はこういう状況になるとは思いもしませんでしたな。」

そう言いながら思いを馳せるのはかつての記憶。

家康からすれば幼き頃に出会つた兄のような存在。

光秀からすれば仕えるべき主君。

形は違えど尊敬していたことには同じ。

「光秀殿は信長様を討つたこと、後悔しておられるか。」
杯を置き光秀を見ながら言う。

それに対して光秀はフツと悲しげな表情をしながら応える。

「そうですな、もしかしたら後悔しているかも知れませぬ。」

「やはりそうでしょうか。」

「わかりますか。」

そう言つて光秀が家康を見る。

家康は信長を討つたことを攻めるような感じではない。

「信長様の天下を望んでいたのはあなたでしたからね。」

そう言つて酒を飲む。

「そうでしたな、信長様の天下。私は誰よりもそれを望んでいたのかも知れませんな。」

そう言いながら深々と考える。

「しかしながら、信長様を討ったことを悔やまれてはいけませんぞ。」

「わかつております、悔やめばそれこそ信長様にしかられそうですからな。」

「ええ、この儂を倒しておきながらそれを悔やむとは何事か。自らが信じた道を進めぬ者を家臣に引き入れた憶えはないわ。などと言いますぞ。」

「全くながら同感ですな。」

二人の会話と酒をドンドン進んでいく。

そして何時しか光秀が信長を討つことになったのかの話になっていった。

「あれは雑賀攻めするときでした。」

そう言つて光秀は語り出す。

信長は自慢の大軍を持つて雑賀衆を壊滅すべく軍議を重ねていた。そして一五八〇年、ついにその時がやってきた。

信長の命で進軍する織田軍。

それに対して雑賀衆は全面戦争を行うつもりで居た。

実際雑賀衆の中にも親織田派が居たのだがこれも大半が戦線に出ていた。

光秀は雑賀攻めを行うこと自体は何の疑問もなかった。

だが、これを殲滅戦と言うことだけが光秀を悩ませていた。

そしてこの戦は織田軍が圧勝であった。

当たり前である兵力差が話にならない、幾ら雑賀衆でも圧倒的なまでの兵力差には勝てなかった。

天下を統一することが民が苦しまずにすむ方法。

それは光秀の理念であった。

それは信長も同じ事であった、しかし二人には大きく違うことがあった。

信長は天下を束ね、万民を救う方法の為には手段を選ばなかった。悪名も買う、悪鬼と恐れられる、魔王とも言われる修羅の道を通る結果を求めていく結果主義者であった。

その為なら長年付いてきた家臣すら切り捨てた。

対する光秀は天下を取るにもなるべく犠牲を出さず天下を束ねる。

結果を求める過程の中で救える者を救う、過程主義という者である。結果を求めた信長と過程を求めた光秀、どちらが正しく、どちらが間違っているというわけではない。

だが光秀には結果だけを求める気にはならなかった。

攻めてくる敵には容赦はしない、しかし問答無用に攻め入ることもしない。

偽善、甘さ、人はそう呼ぶだろう。

だが偽善の何が悪い、偽りの善意で何が悪い、救済を偽善と切り捨てられて助けられなかった者達はどうなる。

助けられそうになかった、だから切り捨てた。

それを悪とは言えない、だがそれを行って良いのであるのか。

今回の雑賀攻めも確かに武器を持った者達は良いだろう、だが民は守るべき民はどうする。

敵だったから、生かせばまた逆らうから、ならば殺して良いと。

その考えを偽善というか、ならば善意とは何だ。

救済が偽善なら殺戮は何だ、全てを破壊することが偽善より良いことなのか。

何時しか光秀はそう考えるようになっていた。

そしてそれが信長への不信感へと進んでいった。

外伝 本能寺の変 下

天正十年、六月下旬。

光秀は信長から中国に侵攻している秀吉の援軍に向かうように指示される。

その際光秀は約一万三千の兵を率いて本能寺に向かっていた。

この時光秀に従う兵士達は信長の命を受けて家康を討つと考えていた。

まさか主が謀反を考えているとは思っていなかった。

しかしそれに従う家臣達は謀反のことを知っていた。

光秀の家臣達も信長を討つことに賛成していた、光秀の母が信長のために死んだこと。

家康の接待で恥をかかされたこと、多くのことが重なったというわけである。

しかし光秀にはそんな怨念や復讐心はなかった、ただ己が信じる道を、己の天下を掴むために。

その為にも信長を超える必要があった。

圧倒的戦力差、あなたはこれを見ても卑怯などとは罵らないでしょうな。

弱肉強食、弱き者が喰われ、強き者が喰らう。

信長はこの中の強者にはいるだろう、しかし強者はより強き者からも喰われる覚悟をしなければならない。

それが弱肉強食なのだから。

信長を殺せれば光秀の勝ち、京から逃げ出せば信長の勝ち。

光秀はこれから行われる事に対して不安とこれまでにない高揚感を感じていた。

「私も武士と言うことか。」

「何か仰いましたか。」

光秀の呟きに利三が反応する。

それに対して光秀は大丈夫と言って手を振る。
京は近く、決戦の時は近かった。

そして七月上旬。

ついに光秀は京を目の前にしていた。

今は時間で言えば深夜、闇を照らすのは月の光のみ、その闇の中で
うつすらと光る光秀の刀。

思えば出会いは信長を上洛させることで室町幕府第十五代将軍である
足利義昭の將軍の座を確かなものにするためであった。

そしてそこで信長に惚れ込み、己を売り込んだ。

あの人の創る明日が、未来が見たかったから。

今の自分とは矛盾、だがそんな矛盾すらあの方と戦うなら力に変え
なければならぬ。

そうしなければあの人に勝つことも己の道を進むことも出来ないだ
ろう。

光秀は刀を振り上げる。

その瞳には一切の迷いもなかった。

そして人を引きつける力強さが籠もっていた。

「敵は本能寺にあり。」

兼を振り下ろす。

光秀の声が闇に浸透する。

言われた本人達は何のことかと思つたが、此処で利三が声を上げた。

「敵は本能寺にいる信長だ、進め。」

そう言つて自ら馬を進めた。

そして前もつて言つていた部下を進めさせて軍を先導する。

それを見た兵達はこの時謀反を行うと知つたのである。

そして進む利三に続いた。

それからは一気に京へと本能寺へとかけていった。

京にはいると光秀はかねてより命令したとおりに軍を二つに分けた。

光秀率いる本隊は本能寺に籠もる信長に斎藤利三率いる別働隊は二条城の織田信忠を攻める。

この時京にいた兵は千足らず。

それを一万以上の兵が攻めたのだ、圧倒的な戦力差であった。

しかし京の人々にはなるべく被害を出さないように攻め掛かる。

「二条城を包囲せよ、時間がない。すぐに終わらせるのだ。」

謀反は時間の問題、京周辺の軍の援軍が来れば傘下の兵も寝返るだろう。

そうなれば全員打ち首だ。

今さら打ち首など気にしないが主君を討つ覚悟をしたのだ、もはや戻れぬ道。

ならば進んで、その先の未来を見る。

そう言う思いを込めて号令をする。

しかし二条城の兵も凄まじい気迫で応戦する。

圧倒的戦力差を誇る此方が攻め倦ねているのだ。

これまで三度に渡る攻撃が防がれている。

しかし利三も諦めたわけではない、最後の賭に出ようとしていた。

本能寺に攻め込んだ光秀も火を放ち信長を捜していた。

立ちほだかる護衛を切りながら進む。

火の手が回り周りには煙が上がっていた。

そしてその前に森蘭丸が立ちほだかる。

「光秀様。何故あなたは。」

そう言つて刀を構えながら睨み付けてくる。

あの方に仕える者として共に戦った仲間。

今ではそれが敵同士。

だが光秀には後悔はなかった。

この後に後悔することになるだろう、だが少なくとも今は後悔する気にはならなかった。

「蘭丸、私には貫きたい道が出来たのです。」

「信長様を裏切つてまでですか。」

「そうしてでもです。」

そう言つて光秀も刀を構える。

「そうですか、ならば。」

「来なさい蘭、あなたの信じる者のために。」

その言葉が両者が動き出す合図となった。

「はああああ」

蘭丸の刀が振り上げられ光秀に迫る。

それを光秀は最低限の動きで受け流す。

そしてその流れで蘭丸に切りかかる。

体勢を崩した蘭丸にそれを受けることは出来ない、仕留めた。

そう思つた瞬間であつた。

蘭丸がとつさに出した小刀で防がれた。

そして両者一旦離れて様子を見る。

「そう言えばあなたは二刀流の使い手でしたね。」

「父から習つた我流ですけどね。」

そして両者が飛び出す。

凄まじい打ち合いが始まる。

火花を散らし、打ち合い、斬り合う。

そして一瞬の刹那、光秀が蘭丸の腕を切り落とす。

「私の勝ちですね蘭丸。」

そう言つて先に進む。

此処で蘭丸を殺さなかつたのは情けなのかはわからない。

だが殺す気にならなかつたのである。

後ろでうづくまる蘭丸を背に歩き出す。

「報告します。」

伝令が光秀に情報を伝える。

「二条城に籠もる敵勢は利三様が撃破。

並びに京都御所の制圧も完了したとのことです。」

「そうか、別働隊は待機。本隊は信長の搜索を続ける。」

「はっ。」

そう言つて伝令がかけていく。

そして光秀は燃え行く本能寺を眺めていた。

そしてその中で一つの人影を見つけた。

門の中で誰かを待つように立っている。

そこで光秀は悟った。

あの御方だと。

そして燃え行く門を破つて中にはいる。

中は意外にも火はなく、静まりかえっていた。

そして光秀の正面にいるのは主君であり、敵である、織田信長であった。

「信長様。」

「光秀よ。」

そして両者は自然と得物を手に取った。

「ほー、なるほど。光秀殿は自らの道を行くために信長様に逆らつたのですか。」

「そんな崇高なものじゃありませんよ。ただ己に嘘をつけなかっただけですから。」

そう言つて酒を飲む。

二人は良い感じに酔っていた。

「それで光秀殿、縁談の件宜しくお願いしますぞ。」

「うむ、光慶にもすっかり伝えておこう。」

そう言っている内に時間が来たようだ。

「もうそんな時間でしたか、これは長居をしてしまいました。」

「私も昔話が出来て良かったですよ。」

「これよりは若い者が背負っていくのでしょうな。」

「あなたの息子と、私の息子が。」

「よき時代を築いて欲しいですな。」

これは戦乱に明け暮れる中であつたちよつとした話。争いの喧噪から離れたゆつくりとした時間。

一人の男に魅了された二人が会話したときであつた。

外伝 本能寺の変 下（後書き）

一応貯めていたストックがつかまりました。
これからまたじっくり考えてこれからの展開を考えていきます。

第二十三章 束の間の平穩

家康と光秀の両者の会談から一ヶ月。

平穩を保っていた明智領に一つの知らせが入った。

「殿ー。」

山崎長徳が声を張り上げながら城の中を走る。

そしてその騒がしさのまま光秀の居る部屋へとはいる。

其処では利三と光秀が碁を打っていた。

「殿大变でございます。」

「どうした長徳、お前の大声は五月蠅くて敵わんぞ。」

そう言つて光秀は石を打つ。

パチッ。

そうすると決定的な一撃だったやうで利三の顔が歪む。

そして起死回生の一手は無いかと思案している。

「それが、北条の軍勢が大挙して徳川領に侵攻。」

それを聞いて光秀は真剣な表情になる。

「して、家康殿は。」

「応戦するも敗走、駿河城が北条の手に落ちたとの知らせです。」

それを聞いてさすがに光秀も立ち上がる。

しかし碁盤を見てしかめ面になる。

対してそれを聞いた利三はすぐに立ち上がる。

「五など打っている暇はございませぬ、今すぐ重臣達を集めましよう。」

何故かそう言う利三の顔は先程より晴れやかであった。

「くつ。長徳、直ぐさま家臣を集めよ。儂もすぐに向かう。」

「はっ。」

光秀の命令を聞くと長徳は直ぐさま駆けていった。

それを見て光秀は利三の方を振り返る。

すると利三は光秀にこういった。

「若の軍略指南の件は次回と言うことに。」

「己、卑怯ぞ利三。」

老いると若い子を可愛がるのである。

光慶に軍略を指南する方がどちらか暮で決めていたのである。

ちなみに光慶は藤孝に軍略指南を受けていた。

そして既に半世紀を生きた両者は越えた両名は老体に鞭打って家臣達が集まる部屋に走っていった。

光秀が来る頃には既に重臣達が勢揃いしていた。

西の抑えに回っているため阿閉貞征、木村吉清は来ていない。

そして各所に視察や各城の守りにについている者達も来ていない。

現在集まっている将は、明智家筆頭家老であり細川家当主、細川藤孝を筆頭に。

伊勢貞興、御牧兼顕、妻木広忠、明智秀満、安田国継、松田政近、山崎長徳等だ。

そして次期明智家当主である明智光慶。

その直属家臣達である蒲生氏郷、鈴木重秀、通称孫一が集まっていた。

「お主等が集まってもらったのは他でもない、北条が徳川領を侵攻したからだ。」

そう言うとその事を知らなかった将は困惑の声を上げた。

北条と言えば一ヶ月ほど前に上田で真田が破ったはずの相手である。

それがこの短期間で再侵攻を起こすなど考えられないのだ。

しかし現実には北条は侵攻している。

「更に侵攻した北条軍は駿河城を落とし更に侵攻を続けているそうじゃ。」

「そこで我らは同盟の義理を果たすべく、そして北条侵攻の足がかりとして北条軍を撃ち破ります。」

そう言うとき家臣達はなるほどという。

しかし今は光慶の元で忍として働いている。

一度光慶の命を狙い暗殺を行ったがその時捕らえられそれより光慶の部下として働いている。

『礼を言うぞ、それでどうであった。』

「はっ、北条軍の侵攻軍は一万五千。侵攻軍の総大将は北条氏直とのこと。」

『そうか、良くそれだけの兵を集めたものだ。』

「先の上田戦では殆ど兵を消費していなかったからな。」

そう言くと光慶も確かにそうだったなと思いつく。

あの時は水計で敵を押し返したので双方大した被害は出ていないはずだ。

『其処まで調べてくれて礼を言うぞ。』

そう言くと初芽は驚いたように声を上げる。

「え？」

『どうした初芽、俺が礼を言うのがそんなに珍しいか。』

実際初芽が光慶に対して驚いたのは笑顔を見せたことである。

そして直に礼を言われたことも数えるほどしかない。

それほどまでに光慶は表情を変えないのだ。

「いいや、お前が笑ったのに驚いてな。」

そう言くと光慶は言い訳するように呟く。

『くっ、確かに俺は感情表現が苦手だ。しかし笑ことはなからう。』

その姿を見て初芽は面白そうに笑う。

それまでにこんな光慶は珍しいのだ。

考えても見れば確かに近頃の光慶は全く笑わなかった。

次期当主としての重圧、他者の命を受け持つプレッシャー、それらが光慶から笑顔を遠ざけていたのだ。

しかし何故初芽はこんなに光慶に向かって平然とお前と言っているのであるうか。

『まあ今日は遅い、我が家に泊まっていくと良い。』

そう言くと初芽は驚く。

「なつ、貴様は敵である私を泊める気か。」
「だそうだ。」

一応初芽はまだ自分のことを徳川方だと言っているのだ。
ちなみに初芽が光慶の部下になったことは徳川忍者集団の頭領である半蔵も知っている。

『敵なら何故俺を殺さん。』

「それは現在徳川と明智が同盟しているし、貴様の行く末を見据えよう。」

何故か喋るにつれて声が小さくなっていく。

『お前のお陰で色々と助かっている。』

「当たり前だ、私は優秀だからな。」

それほど顔を赤面させていても説得力がない。

光慶がこれまで気を許し話す相手も其処までいない

他には孫一や氏郷ぐらいである。

実際光慶は初芽のことを好いている、無論女性としてだ。

ちなみに初芽は史実では石田三成に間諜として監視するが三成の人柄に惚れ、側室のような関係までなったとされる。

それは兎も角、初芽も光慶のことを好いている、人柄的にも他者を引きつける性質がある。

現在最も天下に近い明智家の次期当主に寵愛されているという事実
に平民出の初芽は困惑しているが。

まあ光慶の場合身分関係なく愛するであろうが。

この関係は家康も光秀も知らぬ関係である。

知っているのは光慶の家臣と服部半蔵だけだ。

その後二人は共に夜を過ごした。

後にこの初芽は初芽局として正式に光慶の正室として迎えられることとなるがそれもまた先の話。

これは光慶が普段見せない内面の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8523m/>

明智家 天下統一への道

2011年1月26日06時18分発行